
バカばっかの君たちへ～アホメンパラダイス～

黒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカばっかの君たちへーアホメンパラダイスー

【Nコード】

N9700U

【作者名】

黒

【あらすじ】

バカテスの世界にオリキャラと設定を加えたドタバタコメディー！
基本的に原作沿いでお送りします

一巻終了しました

ぶろろぐ！

【第一問】

『調理の為に火にかける鍋を製作する際、マグネシウムをを材料に選んだ。この時に発生する問題点と代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい』

姫路瑞希の答え

『マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応するため危険である合金の例：ジュラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので鉄では駄目なのですが、姫路さんは引つかかりませんでしたね

土屋康太の答え

『ガス代を払っていなかったこと』

教師のコメント

そこは問題じゃありません

吉井明久の答え

『合金の例：未来合金（すごく強い）』

教師のコメント

すごく強いと言われても

雑賀佳史の答え

『知らん!!』

合金の例：アルミニウム』

教師のコメント

当てずっぽうなのにアルミニウム合金が存在するのが腹立たしいです

文月学園に通じる道

その両脇は俺達が入学した時と同じように桜が咲き誇っていた

「おはよう、佳史」

「おはようじゃ。佳史」

突然声を掛けられて振り向くと、幼なじみの双子が揃っていた

「おはよう、優子に秀吉。にしても珍しいな。お前らが一緒に来るなんて」

「それはワシ達とて別に仲が悪い訳ではないからの」

この翁言葉で話す美少女…もとい男の娘は木下秀吉。男なのに男に大人気な奴。

ちなみに演劇部のホープである

「今日は秀吉の朝練がなかったのよ」

そして秀吉と瓜二つな姉の木下優子。外では優等生を気取ってるが、家ではズボラな奴

「佳史、今何か余計な事考えなかった？」

「……………」

ダッ！

「あ！待ちなさい！！」

「待てと言われて待つバカはいない！」

こんな所で死んでたまるか！

「おお、雑賀か」

「ん？鉄人？」

「西村先生と呼べ！… ったく、俺を前にして堂々と鉄人と呼ぶのはお前と坂本くらいだぞ」

玄關の所で俺を呼び止めたのは西村教諭。通称鉄人。トライアスロンが趣味でガタイがヤバい人

「いや、先生を鉄人と呼ばずに誰を鉄人と呼ぶんすか？」

「誰も呼ばんでいい！全く… ホラ、受け取れ」

鉄人が封筒を俺に手渡す

そしてちょうどその時

「佳史、アンタ足速すぎるわよ…」

「やっと追いついたぞい…」

「ん？木下姉弟か」

「あ、西村先生、おはようございます」

「おはようございますじゃ」

「ホラ、お前らも」

そう言つて二人にも封筒を渡す

もちろん二人はすぐに封筒を開けて…

「よしっ！Aクラス！」

「やはりFクラスじゃ…」

まあ、妥当っちゃ妥当か

「佳史、アンタはどうだったの？」

ま、アンタはAクラスよね、と付け足す優子

「今から見る所だよ。そう焦んなって」

あゝ…糊付けが強すぎて捲れないな…

「…雑賀」

「はい？」

「今だから言うがな、俺はお前を『吉井と坂本に並ぶ問題児じゃないか』と疑っていた」

「失礼な。人をバカ扱いしないで欲しいですね」

「ああ。振り分け試験の結果を見てお前への疑いは無くなった」

もういいや。破っちまえ

俺は封筒を破って中身を確認する

それを横から優子も覗いて来た

そこには、達筆なじで一文字『F』と書いてあった

「お前は問題児だ…化学以外全て寝るとは良い度胸だな」

「この…バカー!!!」

「ちょ!?!何でお前がキレて…待て!その関節はそっちには曲がらなああああ!!!」

何故かお怒りの優子にサブミッションをくらいながら、必死にタツプする

「やれやれ、姉上も素直になればよいのにお」

秀吉が何か呟いていたが、痛みで全く頭に入らなかった

こうして俺のFクラス生活が始まった

第一問

【第二問】

以下の意味を持つことわざを答えなさい

- (1) 得意な事でも失敗してしまう事
- (2) 悪い事があつた上に更に悪い事が起こる喩え

姫路瑞希の答え

- 『(1) 弘法も筆の誤り
 - (2) 泣きつ面に蜂』
- 教師のコメント

正解です。他にも『河童の川流れ』や『踏んだり蹴ったり』などが
ありますね

土屋康太の答え

- 『(1) 弘法の川流れ』

教師のコメント

シュールな光景ですね

吉井明久の答え

『(2)泣きつ面蹴ったり』

教師のコメント

君は鬼ですか

雑賀佳史の答え

『ヨダレの跡』

教師のコメント

後で職員室に来て下さい

「だから悪かったって（何がかはわからんけど）」

「……………（プイツ）」

今、何故か機嫌が悪くなった幼なじみをなだめています

…信じられるかい？この調子が五分くらい続いてるんだぜ？

「ほら、姉上、いい加減機嫌を直すのじゃ。もうAクラスに着いたぞい」

あ、本当だ

パツとみた所、設備はリクライニングシートに個人エアコン、拳げ
句の果てにはフリードリンクに個人冷蔵庫

…どこのホテルだよ

「良かったじゃねえか優子。恐ろしく凄い設備だぞ？」

「……………アンタがいらないと意味無いじゃない」

「？何か言ったか？」

「何でも無いわよ！…そうね。じゃあ私は一年間この教室で快適に過ごさせてもらっわ」

こっちを見てニツコリ笑う優子

…いや、目が笑ってないけども

「やれやれ…この調子じゃあしばらくは機嫌が直りそうに無いのう」

「そう思うならどうにかしてくれよ。後で割食うの俺なんだから」

そう言つと秀吉が俺の肩に手を置き

「…ワシが姉上に口喧嘩含めて勝てた事が一度でもあったかのう？」

「…ごめん」

「まあ、ある程度予想はしてたがの…」

「本当に教室かここ？」

もうなんか見ただけでわかる環境の悪さ。いくら何でも差ありすぎだろ

「ま、まあ中は案外マシかもな！」

「そ、そうじゃの！」

ガラッ

「……………」

ボロボロの卓袱台。腐った畳。割れた窓。

廃屋と言われた方がしっくりくる

あまりの設備に立ち尽くしていると

「ん？秀吉に…佳史！？お前何でここに！？」

悪友の一人の坂本雄二が話し掛けてきた

「一限目の化学以外全部寝ちまつたんだよ…」

「ぶっ！…お前らしいっちゃお前らしいか」

「で？雄二よ。お主はそこで何をしておるのじゃ？」

雄二は今教卓に両手を着いている

「ああ。先生が遅れてるらしいから教卓に上がってみた」

「…っ—ことはお前がこのクラスの代表か？」

「ああ。これでこのクラス全員俺の兵隊だな」

野性味溢れる笑顔をこっちに向けてサムズアップする雄二。

…とりあえずその親指を逆に曲げたい

そして暫く三人で談笑していると…

「すいません、ちょっと遅れちゃいました」

「さつさと席に着けこのウジ虫野郎！」

台無しだー！と言わんばかりにリアクションをとる男子生徒

「よう明久。お前はやっぱりFクラスか」

「あ！佳史。やっぱりって酷くない！」

こいつは吉井明久。俺の悪友その2。特徴は…

「じゃあNH3って何だ？」

「あまり僕をバカにしないで欲しいな。硝酸でしょ？」

この通り生粋のバカだ

「アンモニアだバカ」

「え？…あはは、それにしても…流石はFクラスだね」

「逃げたな」

「えーと、ちょっと通してもらえますかね？」

声がした方に顔を向けると、担任らしき中年の冴えないオッサンがいた

「それと席についてもらえますか？ホームルームを始めるので」

「わかりました」

「うーっす」

「へーい」

え？秀吉？チャイムが鳴る前に席についてるけど？

「二年Fクラス担任の福原慎です。よろしくお願いします」

そう言つて黒板に名前を書こうとして…チョークがないので断念。
流石最低クラス

「全員に座布団と卓袱台は支給されてますか？不備があれば申し出て下さい」

不備しかありません…とは流石に言えない

その後数人が不備を申し出たが、『我慢して下さい』か『自分で何とかして下さい』で押し切られた

…本当にここは学校なのだろうか？

「では自己紹介でも始めましょうか。廊下側の人からお願いします」

その言葉と同時に立ち上がった我が幼なじみ

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる」

「つか本当にそこらの女子より女子らしいな。」

「そこにいる佳史とは幼なじみじゃ」

「「殺せえええ!!」「」」

「え!? ちょ!? 何故に!?!」

「黙れ男の敵! 貴様木下秀吉と幼なじみと言う事はあんなことやこんなことを…」

「するか!! 秀吉は男だ!」

「違う! 秀吉は『秀吉』だ!」

「ワシは男じゃ!」

秀吉が抗議するがガン無視

「諸君、ここはどこだ!」

「「最後の審判を下す法廷だ!」」

「男とは!?!」

「「愛に生き、哀に生きるもの!!」」

「よろしい!それでは「F 異端審問会をぐぺっ!」?」

俺はとりあえず持つて来ていた木刀で須川を殴って異端審問会を強制終了させた

「「会長おおお!」?」

「さ、次行こう」

「相変わらず容赦ないね」

「では次の方、お願いします」

「土屋康太」

……

……

…終わりがいい。もうちょい喋ろうぜ、康太。

にしてもやっぱり女子はほとんどいないな。まあFクラスだし当たり前か

そんな事を思っていると…

「海外育ちで、日本語は会話は出来るけど読み書きが苦手です。趣味は」

あ、女子いたんだ。…この声どつかで聞いた事あるような…

「吉井明久を殴る事です」

美波だな

「誰だっ！？恐ろしくピンポイントかつ危険な趣味を持つ奴は！」

「はろはろー。吉井、今年もよろしくね」

…美波は本当に明久が好きなのか？

そんなこんなで俺の番

「雑賀佳史だ。趣味は特にない。ちなみに嫌いなものは」

そこで俺に攻撃体制を取っている奴らを睨み

「物理的に排除するんでよろしく」

あえて何が嫌いかをいわなかったからか、目をそらして武器を下ろす

「吉井明久です。気軽にダーリンって呼んで下さいね」

『ダアアーリーーン！！』

…おえっ

「失礼、忘れて下さい」

…明久、お前いつかコロス

ガラッ

「あの、遅れて、すいま、せん…」

『えっ?』

しばらく名前と趣味を言うだけの退屈な時間が続いたので寝ていたが、不意にドアが開いたのでそっちに目を向けた

そこには、こんな所にはいないはずの人物がいた

第二問

『戦国時代において、多くの戦場を渡り歩いた『戦さ人』や『風来坊』と称された人物をフルネームで答えなさい』

姫路瑞希と雑賀佳史の答え

「前田慶次郎利益」

教師のコメント

「正解です。雑賀くんは真面目にやれば出来るので、毎回こうしてくれると嬉しいですよ」

吉井明久の答え

「前田慶次」

教師のコメント

「惜しいです。ゲームなどではよく慶次と表記されるので気をつけましょう」

坂本雄二の答え

「佳史」

教師のコメント

「それは雑賀くんです」

柔らかそうな髪。白い肌。そして大きな胸。

「ちょうど良かったです。今自己紹介している所なので姫路さんもお願ひします」

「はっ、はい！あの、姫路瑞希といいます。よろしくお願ひします
…」

姫路瑞希。常に学年上位をキープし、彼女にしたいランキングでも一、二を争う女子（康太調べ）

「はいっ！質問です！」

「あつ、はつ、はい何ですか？」

「何でここにいるんですか？」

聞く人が聞く人ならごつさ不愉快な質問だが、これが今のFクラスの総意だ

「そ、その…試験の最中高熱を出してしまいまして…」

なるほど。納得した

「俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに…」

「待て。お前今何か伏せただろ」

「俺は弟が事故にあったと聞いて…」

「黙ろっな一人っ子」

「前の晩、彼女が寝かせてくれなくて」

「FFF団に彼女が出来たら天変地異が起こるな」

「『『『そこまで言うか！？（泣）』』』」

うるせえ。一人で全部ツツコんだのを評価してほしいくらいだ

「でっ、では一年間よろしく願いしますっ！」

顔を赤らめながら空いている席に向かう姫路

…なんか小動物みたいで和む

「姫路さんやっぱり可愛いなあ…」

「だったらとつと告ればいいのに…」

「むっ、無理だよ！姫路さんが僕なんかに興味がある訳無いよ」

「…はあ」

「なんでため息！？」

「いや、バカは死ななきゃ治んねえかと思っただけ」

「傷付いた！今の言葉は特に傷付いた！」

鈍感って治るのか？

「きっ、緊張しましたあ…」

偶々俺達の近くに座る姫路。

ちなみに俺は雄二の前で明久の斜め前だ

「あの、姫「姫路」

…明久、言葉遮られたくらいで号泣すんなよ

「はっ、はい！何ですか？えーっと…」

「坂本だ。坂本雄二。」

「よう、姫路。体調はもういいのか？」

「あつ、雑賀くんもFクラスだったんですか？」

「まあな」

本当の理由は恥ずかしくて言えない

「それは僕も気になるよ！」

「よ…吉井くん！？」

めっちゃ驚いた様子の姫路。

まあ、好きな奴が同じ教室にいればそうなるわな

「姫路、明久がブサイクですまん」

「フォローにすらなつてねえな」

「そ、そんな！目もパツチリしてて顔のラインも細くて綺麗だし…
その、むしろ…」

「まあ、明久に興味がある奴がいるくらいだからな」

「そつ！それって誰ですか！？」

「そう慌てんな。えーっと…誰だっけ雄二？」

「確か久保」

利光だつたかな」

「あ、そいつだ」

久保利光。Aクラス。性別、男

「おい明久、さめざめと泣くな」

「大丈夫だって。半分冗談だから」

「半分！？ねえ！残りの半分は！？」

奴は興味があるんじゃない…ガチだ

「…強く生きろよ、明久」

「僕の身に何が起こるの！？何か怖いんだけど！？」

「はいはい、その人達、少し静かに」

ガラガラガラ

「代わりを取ってきますので自習していて下さい」

…さて、寝るか

「雑賀くん、起きて下さい」

「ん…？なんだ…？」

「坂本くんの紹介です。坂本くんに自分の番の時に起こしてくれて頼まれたので…」

「そうか、ありがとう」

礼を言って前を見ると、雄二が康太の正体をバラしていた

：何故わかったかった？康太が必死に首を振って否定するのはエロ
関連しないからさ

「姫路の事は皆その実力をよく知っているはずだ」

「え？私ですか？」

「そつだ、俺達には姫路さんがいる」

「ああ、彼女さえいれば何もいらないな」

ツッコまないよゝええ、ツッコみませんよゝ

「木下秀吉だっている」

「演劇部のホープか！」

「ああ、確かアイツ木下優子の…」

残念だったな！確かに優子は成績良いが秀吉は演劇に入れ込みすぎ
たせいでバカだ！

「当然俺も全力を尽くす」

「確かになんかやってくれそうな奴だ」

「坂本って確か昔神童とか呼ばれてなかったか？」

「雑賀佳史だっている」

「雑賀って確か…」

「思い出した！確か一年の一番始めのテストで一位になった奴じゃねえか！」

また昔の事を…

「それだけじゃない。佳史の別名は…『今孔明』だ」

「『なんだと！？』『』」

「今孔明って確か一年の疑似試召戦争で無敗の軍師じゃないか！」

「霧島と久保がいたチームに勝ったアイツか！」

「成績も学年上位一桁台と聞いたぞ！」

「このクラスにAクラス級の奴が三人いるってことか！」

クラス全域に『いけるんじゃない？』オーラが漂う

…でもな

「それに吉井明久だっている」

シーン

「…やっぱりな」

明久はオチだよな

「誰だ吉井って？」

「さあ？」

せつかく上がった士気が下がる

「ちょ、ちよつと雄二！どうしてそこで僕の名前をだすのさ！僕は普通の人間なんだから　ってどうして雄二も佳史も僕を睨むの！？士気が下がったのは僕のせいじゃないでしょ！？」

「やれやれ、皆知らないなら教えてやる。コイツは『観察処分者』だ」

「…それってバカの代名詞じゃなかったか？」

名も無きモブよ、グツジョブだ

「ち、違つよ！ちよつとお茶目な十六歳につけられる」

「いかにも、バカの代名詞だ」

「肯定するな！バカ雄二！」

「違つぞ雄二」

「佳史！君だけは信じてたよ！」

…ふっ、バカめ

「学園生活不適合者かつ小学校からやり直したほづがいいレベルの学園公認のバカだろ？」

「君を信じた僕がバカだった！」

「真実を伝えただけだが、何か？」

「もういいよ！佳史のバカ！」

「…明久、気を付けろよ？お前のバカは…凶器だから」

「うわーん！」

俺のターン、俺のターン、俺のターン、俺のターン

「観察処分者って確かフィードバックがあるんだよね？」

「じゃあ、簡単に召喚出来ないやつがいるって事か？」

「「気にするな。どうせいてもいなくても同じような雑魚だ」」

「二人して一字一句ハモらなくても…」

「さて、さっきも言ったが…不満はないか？」

『大ありじゃあー！』

二年Fクラス魂の叫び

「ちょ！？流石に無視は酷いよ！？」

「ならば全員ペンを執れ！出陣の準備だ！」

『おおっー！！』

「お、おー」

「姫路、無理にのらなくていいんだぞ？」

その後、明久がDクラスに死者：じやなく使者に行つて殺されかけたりしたが割愛

「明久、宣戦布告はしてきたな？」

「一応午後に開戦とは告げてきたよ」

「じゃあ先に昼だな。ホレ、明久」

そう言つて俺は賞味期限切れのメロンパンを渡す

「あ、ありがとう佳史」

「珍しいな、佳史が食料の賞味期限を忘れるなんて」

「まあ偶にはな」

「あ、あのー…」

「賞味期限切れって？」

今の会話を疑問に思ったのか、女子二人組みが聞いてきた

「ああ、コイツ普段何も食べやがらねえからな。偶にこうやって分けてやるんだ…って、もうこんな時間か。ちよっと思ってるわ。」

「あれ？雑賀どこにいくの？」

「二 A。寮のルームメイトとここに」

「ああ、そういえば雑賀くんは寮住まいでしたね」

文月学園には学校に寮があるのだが、別に全寮制の学校では無いので、自宅から通う奴の方が多い。

しかし、学校行事などの関係で一応全員が一寮、二寮、三寮に分けられる

あ、ちゃんと女子寮と男子寮に分かれてるからな？

「まあそういうわけだから、ちよっと思ってる」

「午後には帰ってこいよ？」

「わかってる」

そう言つて俺は屋上を後にした

ガラッ

「将いるか？」

「あれ？雑賀くん？」

入り口の近くにいたのは、女子寮にいる工藤だった

「ああ、工藤か。ちょうどいいや。忘れもんだって将にこれ渡してくれ。」

「なになに？もしかして手作りのお菓子とか？だったらボクも貰つていい？」

「ズルいわよ愛子！それならアタシももらうわ！」

「「うわっ！」「」

優子…突然出てくるのは止める…

「御生憎様。寮生用の弁当だよ」

「「なーんだ」「」

「んじゃ、そーいう事で…優子？」

帰ろうとすると、何故か優子に襟を掴まれていた

「まあまあ、せつかくだから一緒にお昼を食べましょう」

「えー…めんど」(ニコツ)…ゼヒゴイッショサセテクダサイ」

その後は優子に連行されて優子、愛子、後佐藤…？と弁当を食べた

…周囲の視線が痛かった

まあ、直に開戦だし、その時に憂さ晴らしすつか

第三問

「以下の英文を訳しなさい

This is the bookshelf that my
grandmother had used regularly .
」

姫路瑞希の答え

「これは私の祖母が愛用していた本棚です」

教師のコメント

「正解です。きちんと勉強していますね。」

土屋康太の答え

「これは
」

教師のコメント

「訳せたのはThisだけですか」

雑賀佳史の答え

「四、五年前に売ってしまいました」

教師のコメント

「そういえば雑賀くんは…すみませんでした」

吉井明久の答え

「
」
x」

教師のコメント

「できれば地球上の言語で」

Dクラス戦が始まった

始まったんだが…

「何で参加出来ねんだよおお!!」

「雑賀くん、テスト中ですよ」

「あ、スンマセン」

俺は回復試験を受けていた…しかも全教科。つまりは総合科目の

いや、まあ寝てた俺が悪いんだけどさ、なんかこう…納得いかない
感が…

え？今テストに集中しなくていいのかって？いいんだよ。どうせ保険体育だし。

「…はい、保険体育は終了です。次は現代国語に入ります

ちなみに今の試験監督は学年主任の高橋女史。さっきまで立会人に
駆り出されていたみたいだが、元々の試験監督だった鉄人が「戦死
者は補習うう!!」とか言いながら飛び出して行ったので、その
代わりで来たらしい

「現代国語終了」

「さて、次は…」

ピンポンパンポン

ん？何だ？

《連絡致します》

この声は…須川？

《船越先生、船越先生》

なるほど、偽報か。となると雄二の指示かな？

《吉井明久君と雑賀佳史君が体育館裏で待っています》

………は？

《生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです》

船越先生 婚期を逃し、ついに生徒に単位を盾に交際を迫るようになった + 今の須川の放送 俺と明久の貞操が…

「ふ…」

「さ、雑賀くん？」

何故か姫路が怯えているが気にしない

「高橋先生、先に姫路だけでテスト受けさせてやって下さい。すぐ戻りますから…」

「ど、どこに行くのですか？」

「いえいえ、ちょっとばかり始末しに…お仕置きしに行くだけDeathから」

「な、なんか一部発音が…」

高橋先生がまだ何か言っていたが知らない。

そしていつの間にか放送室の前。どうやら怒りで限界を色々突破したらしい

「須川ああああっ!!」

「げっ！雑賀！？お前何でここに！？テスト中じゃなかっぎやああああああ……!!」

とりあえず須川を始末した後、再び放送器具をいじる

…どうせ元凶は…アイツだ！

ピンポンパンポン

《先ほどの放送について訂正致します。船越先生、船越先生、至急、Fクラス教室までお越し下さい。坂本雄二くんから大事なお話があるそうです。婚姻届と実印を持って行ってあげて下さい》

そうやって、放送室から試験教室まで行く途中、「佳史iiiiiiii
いいい!!」とか言うゴリラの声が聞こえたが、俺は知らないよ…

〔総合科目テスト終了〕

「さて、姫路行くぞ?」

「あ、はいっ」

今回の俺らの仕事はDクラス代表の撃破。予定だと、姫路が近衛部隊を始末している間に俺が代表を始末することになっている

「お、やってるな」

「雑賀くん、急ぎましょう!みんながどんどん西村先生に捕まっていってます!」

「そうだな」

そして代表らしき奴の側に行き、肩を軽く叩く

「ん?雑賀に姫路さん?どうしたの?Aクラスはこの廊下は通らなかったはずだけど」

「いやいや、それがな…」

「佳史に姫路さん、後はよろしくね?」

「は?」

「Fクラスの雑賀佳史だ。Dクラス代表に現代国語勝負を申し込む。」

「はあ、どうも」

「サモン！」

『Fクラス 雑賀佳史 VS Dクラス 平賀源二』

現代国語 624点 VS 129点 』

「え？あ、あれ？」

「悪いな、国語は得意科目だ」

俺の召喚獣が平賀の召喚獣を日本刀で一閃し、Dクラス戦はFクラスの勝利で集結した

「うおおおおっ！！」

Fクラスからは歓喜の声が、Dクラスからは絶望の音がそれぞれ響き渡る

「やっぱり坂本は凄い奴だったんだな！」

「姫路さん愛してます！」

だから誰だ！？さつきから姫路にアプローチしてる奴は！？

「あーまあ、なんだ。そう手放して褒められるとなんつか…」

その後続々と雄二に握手を求めるFクラスの面々

「雄二！僕も雄二と握手を！」

…ん？今一瞬明久の手に…

ガシッ

「雄二…どうして僕の手首を押さえるのかな…！」

「押さえるに…決まっているだろうが…っ！」

カランカラン…

雄二が明久の手首をひねると、まさかの包丁が出てきた

「「「……………」」」

「…今、何をしようとした？」

「もちろん勝利を祝う握手を手首がもげるほどに痛いっ！」

「佳史」

「任せろ」

俺はペンチを持って明久の手を握る

「す、ストップ！僕が悪かった！」

「「ちっ！」」

明久の生爪を剥ぐチャンスが…

「まさか雑賀と姫路さんがFクラスだったなんて…」

そんな声が聞こえ、振り向くと、廊下に力無く座り込む平賀がいた

「悪いな。これも戦争だ。」

「わかってる。Fクラスを甘く見た俺達が悪いんだ」

自分の非を認め、しっかりと現実を受け止める平賀。

コイツ案外上に立つ才能があるのかもな

「ルール通りにクラスを明け渡そう。ただ今日はもう遅いから作業は明日でいいか？」

「「いや、そんな必要はない」」

「え？」

「何でお前が驚いてんだ？」

口々に話聞いてない俺でもわかるのに

「じゃあ佳史はわかるの？」

「どうせ雄二の事だから目標はAクラスなんだろう？という事は景気

づけと戦争に慣れさせる為、後Bクラス戦の下準備：だろ？」

「正解だ。流石だな」

「んじゃ悪いが俺もう帰るわ」

「寮の門限はまだじゃないの？」

「いや、行かないと俺の関節が一個増える事に…」

マジで。冗談抜きで

「明久行かせてやるのじゃ」

「元々ダメなんて言ってないけどね。じゃあ佳史、また明日」

「おう」

「遅いわよ!」

「じゃあ先に帰つとけよ…」

校門の前に着くと早々に優子が怒っていた

「それじゃ意味ないのよ!…それくらい気付きなさいよ。バカ」

「何してんだ?早く帰るぞ?」

「待つて!どうせなら駅前のラ・ペティスでクレープ食べて帰りましょ?」

どうせ嫌って言うても無駄なんだろうなあ…

まあ甘いもんは好きだしいいか

「別にいいぞ」

「やった!じゃあ佳史の奢りね!」

「え?…ちょ、ちょっと待て!奢るなんて一言も…」

「さあ、レッツゴー!」

「聞けえええええ!!」

その後、しっかりと奢られました

今月の小遣いが…(泣)

第四問

『以下の文章の（ ）に正しい言葉を入れなさい』

光は波であつて（ ）である

姫路瑞希の答え

「粒子」

教師のコメント

「よくできました」

土屋康太の答え

「寄せては返すの」

教師のコメント

「君の解答はいつも先生の度肝を抜きます」

雑賀佳史の答え

「宇多田」

教師のコメント

「先生はあの人のファンです」

吉井明久の答え

「勇者の武器」

教師のコメント

「先生もRPGは好きです」

「おはよー」

「ういーっす」

「おう、二人共。時間ギリギリだな」

偶々廊下で会った明久と教室に入ると雄二が最後の悪あがきをしながら挨拶してきた

「それより明久、昨日の後始末はいいのか？」

ああ、そういえばなんか美波が怒り狂ってたな

「ああ、もういいよ。生爪剥がされてまですることじゃないし」

「いや、俺の始末じゃなくて」

「なんだ、まだ根に持ってたのか？」

「佳史は雄二が憎くないの？」

「もう既に復讐はしたしな」

ニヤリと笑って雄二を見る

「このやろ」「吉井っ!!」

「じぶあつー！！」

雄二が切れかけたときに美波が明久にバックキックを喰らわせた…
やべえ、今足が一瞬見えなかった…

「し、島田さん…」

「アンタ昨日ウチを見捨てただけじゃなく器物破損の罪までかぶせ
たわね…！」

般若のごとき形相で明久に迫る美波

…明久、強く生きろよ

「おかげで彼女にしたいランキングが上がっちゃったじゃない
！」

「…」（まだ上がる余地があつた事が意外だ）「…」

「…ま、まあ、同時に彼氏にしたい女子ランキングも上がったんだ
し…な？」

「そのランキング、矛盾しか無いのよ！」

「腰の関節が千切れるように痛ぎゃあああああ…！！」

まあ、いつもの事だし置いといて…

「雄二、お前こんな所でのんびりしてていいのか？」

「?どういう事だ?」

「一限目の数学のテスト…試験監督、船越先生だぞ?」

「嫌ああああ!!!」

「……………」

「おい、生きてるか雄二」

ちなみに船越先生は明久の近所のお兄さん(?)を紹介して事なきを得たようだ…実に残念だ

「あー…死ぬかと思った…」

「生きてんだからいいだろ?それより食堂行こうぜ?」

「そうだな!今日はラーメンとカツ丼とチャーハンとカレーにすっかな」

本当に疲れてんのかコイツ?

「じゃあ僕は贅沢にソルトウォーターでも…」

「お前ついに塩水すら贅沢と言うようになったか…」

明久の言葉に全俺が哀れんだ

「ん？吉井達は食堂に行くの？だったら一緒にいい？」

「別にいいぞ？」

「…………（コクコク）」

康太、下心がみえみえだぞ？

「あ、あの皆さん！」

「ん？瑞希？お前も行くか？」

俺はDクラス戦の最中位から姫路を瑞希と呼ぶようになった

本人曰わく、美波を含む皆は名前で呼んでるのに、自分だけ名字だと壁があるみたいで嫌、だそうだ

「違うぞい、佳史。姫路、昨日の約束の弁当じゃろ？」

最近空気になりつつあった秀吉。

…お前ポニーテールなんかしてたらまた優子に殺されるぞ

「はっ、はい！迷惑じゃなかったらどうぞー！」

恥ずかしそうに弁当を差し出す瑞希

「迷惑なもんか！ねっ、雄二に佳史！」

「そうだな、ありがたい」

「サンキューな瑞希」

「そ、そうですね？良かった〜…」

ほにゃ〜、と笑う瑞希。コイツはいちいち小動物みたいになるな…
癒やされる

「むーっ…瑞希って意外と積極的なのね…」

そして美波はいちいち肉食系女子だな

「それじゃったらこんな所でなく屋上に行かんかの？」

「そうだな、せつかくのご馳走なんだしな」

「それなら俺は飲み物でも買ってくる。昨日頑張ってくれた礼も兼ねてな」

珍しく雄二が気の利く事を言い出す

「あ、それならウチも行く！一人じゃ持ちきれないでしょ？」

「!？」

「いや明久、別に美波はお前の命を狙ってないからな？」

明久の中での美波の認識が知りたい

「風が気持ちいいね」

屋上に着いたらすぐに瑞希がシートを敷いてくれたのでそこにすわる

「あの…あまり上手くはないんですが…」

そんな謙遜をしながら瑞希が弁当のふたをあけると、きれいに盛り付けられたおかずとおにぎりがでてきた

「「「おおっ！」「」」

「凄いよ姫路さん！塩と砂糖以外の物が入ってるよ！」

「よっ…喜んでもらえて良かったです…」

明久、瑞希が引いてる引いてる

まあ、明久の事だからリアルにそんな食生活なんだろうな…

だから寮で暮らせて言ってるのに

「吉井君や皆に栄養をつけてもらおうと思って張り切っちゃいましたっ」

にこやかに笑う瑞希：本当に出来た娘だ

「姫路はいい嫁さんになりそうじゃのう」

秀吉は優子よりはいい主夫になりそうだな

しっかし…なんか忘れてるような…

「じゃあ、早速このエビフライを…」

ヒヨイ

なんだ？何か物凄く重要な事だったような…

「あつ！ずるいぞムツツリーニツ！」

…一年のとき…家庭科…調理実習……………はっ！！

「待て！康太！！」

パクッ

ゴッ！

ビクンッ…ビクンッ…

「「！？」」

くっ…遅かったか…！

康太は正座のまま真後ろに頭をぶつけ、まな板にのせられた鯉みたいに痙攣している…

「わわっ！？土屋君！？」

姫路に声をかけられるやいなや康太は根性で起き上がり、姫路にむけてサムズアップする

…きつと、『凄く美味しいぞ』って言いたいんだろうが…足が生まれたての小鹿みたいに震えてるぞ…？

「皆さんどんどん食べて下さいね！」

もうデフォルトで笑ってんじゃねえかって言うくらいキラキラした笑顔の姫路…今は悪魔にしか見えん

（くっ、間に合わなかったか…）

（ねえ二人共、さっきのムツツリーニどう思う？）

（…どう考えても演技には見えん）

（アウトだ）

（だよねヤバイよね…）

（ヤバイなんてもんじゃねえ。一年のときに家庭科の調理実習で姫路の作ったポトフを食べた奴全員ぶっ倒れた）

（（…マジで？））

マジだ。そして未だに原因不明だ

（明久、佳史、お主ら身体は頑丈か？）

（正直胃袋には自信ないよ。食事の回数が少なすぎるから…）

（俺もだ。割と飯抜いたりするからな…）

ちなみにこれまでの会話中俺達はずっと笑顔である

アイコンタクトって便利だね！

（…ならばここはワシに任せてもらおう）

（そんな！危険だよ！）

（早まるな秀吉！）

（大丈夫じゃ。ワシは存外頑丈な胃袋でな、ジャガイモの芽を食べた程度ではビクともせん）

いや、お前確かその後一週間下痢だったよな！？

（安心せい、ワシの胃袋を信じて…）

「待たせたな！」

秀吉が見た目に反して男らしいセリフを言おうとした時、雄二が戻ってきた

「へえ、こりゃ美味そうじゃないか。どれどれ…」

「あっ！待て雄二！」

「ん？」

パクッ

ガッ！

カラカラカラカラ…

「さっ、坂本！？ちよつとどうしたの！？」

雄二が倒れた時に散らばった缶の音がやたらと響く…

間違いない、本物だ…

あの雄二ですら卒倒かよ…瑞希、恐ろしい娘！

（…毒を盛ったな？）

（毒じゃないんだ）

（…瑞希の、実力だ）

「あ、足が…つつてな…」

…さっきも思ったがそこまでして瑞希を庇う必要があるか？

ここは心を鬼にして…

「なあ、瑞希、この弁当…」

「ああっ！姫路さん！アレは何だ！？」

「えっ？」

「もがつ！？」

そして何かが俺の口の中に入った瞬間、意識がブラックアウトした
…

第五問

『ベンゼンの化学式を書きなさい』

姫路瑞希の答え

『 C_6H_6 』

教師のコメント

簡単でしたかね

土屋康太の答え

『ベン+ゼン=ベンゼン』

教師のコメント

君は化学をなめていませんか

吉井明久の答え

『B E N Z E N E』

教師のコメント

後で土屋君と一緒に職員室に来るように

雑賀佳史の答え

「C6H6…だったような違ったような…」

教師のコメント

何故うる覚えなんですか？

…あと、坂本君と協力して吉井君と土屋君を生活指導室まで引きずってでも連れていって下さい

「そついえば坂本、次の目標だけど」

「試召戦争のか？」

現在、帰って来た美波と還ってきた俺、雄二、康太を交えてミーティング中だ

あの後、どうやら雄二がデザートを処理させられたらしい

「うん。相手はBクラスなの？何度も聞いてるけど目標はAクラスじゃないの？」

まあもつともな質問だろう。Aクラスが目標だと宣言しているのにいつまでも攻めないのは不安になる

「正直に言おう。どんな作戦でもうちの戦力じゃAクラスには勝てない」

常識に考えてそりゃそうだ。

まず点数の違い。雑兵どもはともかく、優子を含むトップ10…まあ瑞希と俺がこっちにいるからトップ8か。コイツらは俺か姫路でサシでやって勝てるかどうか…代表の霧島に関しては全力でやって勝てるかどうかだ

「どんな作戦でも必ず俺か瑞希が出る事になる…そうなりや霧島を倒すなんざ夢のまた夢だ」

「それじゃ最終目標はBクラスに変更って事？」

「いいや、そんな事はない。Aクラスをやる」

「雄二、それじゃさつきと言ってる事が違うじゃないか」

たまらず明久が口を挟む

「違わねえよ。いいか明久？普通にやって勝てないなら勝てる状況を作り出せばいいんだ」

「佳史の言う通りだ。クラス単位では勝てないだろう。だから一騎打ちに持ち込むつもりだ」

「そっか、だからBクラスを攻めるんだね」

明久にしては勘がいいな

「でもどうやって一騎打ちに持ち込むの？」

前言撤回。やっぱりバカだ

「Bクラスを使う。明久、下位クラスが負けたら設備はどうなるか知っているな？」

「え！？えーと…設備を一つ落とされるんだよ！」

…瑞希に助けてもらったな

「そうだ。つまりBクラスならCクラスの設備になるわけだ」

「そうだね常識だね」

どの口がぬかすよ

「…では上位クラスが負けた場合は？」

「悔しい」

「ムツツリーニ、ペンチ」

康太が頷いて雄二にペンチを渡す

「僕を爪きり要らずの身体にする動きがっ！？」

…はぁ

「雄二」

「佳史！信じてたよ」

そうかい。俺は…

「やり方が甘い」

お前を潰す予定なんだがな

常に持ち歩いている木刀を取り出す

「更に状況が酷くなった!？」

「相手クラスと設備が入れ替わるんですね？」

瑞希が明久にフォローを入れる

…チツ、瑞希に感謝しろよ

「そのシステムを利用して交渉をする。Fクラス設備になるよりはマシだろうからな。まず上手くいくだろう」

「『Bクラスが攻めた直後に攻め込む』とても脅して交渉すればまず応じるだろうな」

振り分け試験直後の今、クラスの差は点数の差だからな

「じゃが、それでもAクラスが交渉に応じるじやろうか？」

「そこら辺は大丈夫だ」

…生贄もいることだしな

「とにかくBクラスをやるぞ！細かい事は後回しだ」

「まあ、考えがあるならいいけど…」

「でだ、明久」

「断る」

おお、いつになく反応が早い

「…いい、雄二、俺が行こう」

「ん？でもお前に何かあったら…」

「僕はどうなってもいいのか！？」

「心配するな。ちょっとBクラス代表に用があるだけだ」

「ねえ無視！？」

「うるせえ」

「げふっ！？」

「なんと言つか…哀れじゃのう…」

「……同感」

明久を黙らせた後、俺はBクラスに向かった

「よお、根本はいるか？」

Bクラスのドアを蹴り開けて中の奴らに聞く

「あ？何の用だ？」

「…FクラスはBクラスに試召戦争を申し込む。…覚悟しとけ。明日の昼から開戦だ」

それを聞いた奴は嫌らしい笑みを浮かべて

「へえ…最低クラスがわざわざ負けにくるのか。ご苦勞なことだ」

「言ってる。じゃあな」

俺はここにいるのも胸くそ悪いのでそのまま帰ろうとするが…

「まあ、待てよ。もうちょっとゆっくりしていてもいいんじゃないか？」

根本が手を上げると、何人かの男子が俺を取り囲む

「やれやれ…手を出さなきゃ見逃してやろうと思ったんだが…」

「どっちの立場が上かわかっているのか？…お前ら！やってしまえ！」

「…はあ」

面倒くせえな

「…で？もう終わりか？」

俺の足元にはBクラスの男子の死体（違）が大量に横たわっていた

「そ、そんなバカな…」

「もういいか？さっさと戻りたいんでな。…じゃあな、『卑怯者』」

「…くそっ！」

そうして俺は悠々とBクラスを去った

第六問

『上方置換法と下方置換法について説明しなさい
また、置換法をもう一つ書きなさい』

姫路瑞希の答え

「上方置換法は空気より軽い気体を、下方置換法は空気より重い気体を集めるのに使う
置換法…水上置換法』

教師のコメント

「正解です。空気の重さについて勘違いする人は多いのですが、よくできました」

島田美波の答え

「セクハラです!!」

教師のコメント

「痴漢ではなく置換です。確か島田さんは帰国子女でしたね？漢字についても勉強してください」

土屋康太の答え

「上方置換法…胸

下方置換法…尻

他の置換法…車上痴漢法」

教師のコメント

「呆れを通り越して清々しいです。

…解答の血痕は土屋君のですか？」

〈翌日・昼休み〉

「さて、皆。午後はBクラスとの試召戦争に突入するが殺る気は十分か？」

「「「おおーっ！！！」」」

Fクラスに野郎共の声が響きわたる

顔には出さないが、俺もこの戦争は殺る気十分だったりする

「今回の戦争は敵を教室に押し込むことが重要になる。その為開戦直後の渡り廊下戦は絶対負けるわけにはいかない

…そこで前線部隊の指揮を姫路と佳史にとってもらう」

「がっ、頑張りますっ」

「任せろ、大将」

「野郎共！きつちり死んで来い！」

「「「うおおおーっ！！」」」

…相変わらず単純な奴ら…

キンコンカンコン

何とも絶妙なタイミングでチャイムになる…雄二め、狙ってやがったな

「よし、行つてこい！！！目指すはシステムデスクだ！」

「いいな野郎共…Fクラス、出陣^でるぞ！！」

「…「しゃあー！！！！」…」

雄二が「ちょ、俺のセリフ…」とか言つてたのは気にしない方向で

「いたぞ！Bクラスだ！」

俺達は数学、英語W、物理を武器にBクラスに突っ込む

理由はBクラスは文系が多いのと、数学の長谷川先生は召喚範囲が
広い（原因不明）からだ

「大丈夫か？瑞希」

「は…はい…」

ほんのちよつと走っただけなのに瑞希は息も絶え絶えだ

…流石に身体弱すぎないか？

「生かして帰すなーっ！」

おっと…戦闘が始まったか

「瑞希、ちよっとペース上げるぞ」

「はいっ！」

俺らが着いた時には…

Bクラス	野中長男	V S	Fクラス	近藤吉宗
総合科目	1943点	V S	764点	

Bクラス	金田一祐子	V S	Fクラス	武藤啓太
数学	159点	V S	69点	

Bクラス	里井真由子	V S	Fクラス	君島博
物理	152点	V S	77点	

…うん、絶望的だね

…ゴメン、自分でもキモかった

「お、遅れ、まし、た…。ごめ、んな、さい…」

「いや、マジで大丈夫かお前？」

瑞希のあまりの体力のなさに少し心配になる

明久も瑞希を心配して近寄ってくる

「来たぞ！姫路瑞希だ！」

Bクラスのモブ1が叫ぶ。流石に瑞希の存在はバレてるか

「隣は雑賀佳史だ！油断するな！」

あらら、俺もバレてんのかよ

「瑞希、ご指名だ。行くぞ？」

「姫路さん、来たばかりで悪いけど…」

「は、はい。行つて、きます」

トタトタと戦場に入つて行く瑞希。

なんか…和むわ…優子とは大違いだ

勿論俺も指名（笑）されているので瑞希と一緒に前に出る

そして瑞希は数学の、俺は英語Wのフィールドに入った

「山田先生！Bクラスの香川です！雑賀君に勝負を挑みます！」

「私も行きます！」

「私も！」

Bクラスの女子三人が山田先生に召喚許可を求め、承認される

「『サモン!!』」

「サモン」

女子三人の召喚獣はそれなりの装備で、全員西洋剣だった

対する俺の召喚獣は、和服で袴に男用の着物、上に長めの黒い羽織りを羽織って帯を締め、野太刀と小太刀を装備している

Bクラス 香川幸 & 三代玲奈 & 西川歩

英語W 175点 & 203点 & 188点

流石文系。それなりに点数が高い

「佳史くんならやられてもいいかなって思ったけど…」

「案外弱そうね」

「…おいおい、人を見かけで判断すんなって習わなかったか?」

「「え?」」

ザシュ!

次の瞬間には、香川と西川の召喚獣は戦死していた

Fクラス 雑賀佳史

英語W 443点

「そ、そんなの勝てるわけ無い!!」

「悪いな、これが戦争だ」

ニコツと三代に笑いかけ、召喚獣にトドメをさす

「0点になった戦死者は補習!!」

「ごしゅーしょーさまー」

横を見ると、瑞希も敵を倒したようで、みんなの方を向いて

「み、皆さん頑張ってください!!」

その一言で湧くFクラスメンバー（バカ共）

今日も順調に瑞希信者急増中

「…さて、瑞希。後明久と秀吉も。ここは須川に任せて一旦教室に戻るぞ」

「え？何で？」

明久が疑問を口にする

「Bクラスの代表はあの根本だ」

「根本って…あの卑怯者で有名な根本かの？」

「ああ。何されるかわからんし、雄二が危ないかも知れんからな」

そこで俺達はクラスに戻ることにした

「…うわ、こりゃ酷えな」

教室に戻ってみると、卓袱台はボロボロにされていて、シャーペンは折られ、消しゴムは千切られていた

ようするに設備を破壊されていた

「これじゃ補給がままならないね」

「地味じゃが点数に影響の出る嫌がらせじゃな」

「あまり気にするな。修復に時間はかかるが作戦に大きな支障はない」

明久と秀吉と話していると、雄二が教室に入ってきた

「雄二…お前どこに行ってたんだ？」

今教室に入って来たんだから壊されたのはその間だろう

「協定を結びたいと言う申し出があつてな。調印のために教室を空

にしていた」

「協定？」

「ああ。4時までには決着がつかなかったら戦況をそのままにして続きは明日午前9時に持ち越し」

それだけならこっちにめっちゃくちや有利だな。姫路の体力的に

「その間は試召戦争に関わる一切の行為を禁止するってな」

「！何だと！？」

「ん？どうしたんだ佳史？」

「お前…もしかとは思うが調印してないよな…？」

「いや、うちに都合のいい条件だったから合意したが」「このバカ野郎！！」「は？」

「け、佳史！一体どうしたのさ！？」

「落ち着くのじゃ！」

明久と秀吉に止められてようやく落ち着く

「…悪かったな。ついカツとなった…」

「いや、いい。それより何であんなに怒ったんだ？」

雄二は懐が深いな

「…もう一度聞くが条件の一つは『試召戦争に関する一切の行為の禁止』であってるな？」

「ああ」

やっぱりか…こりやちよつと雲行きが怪しくなつて来やがったな…

「…なら、明久。お前なら試召戦争と聞いて何を連想する？」

「え？えーっと…勉強とかミーティングとか…痛いとかかな？」

「最後のはお前だけだがその通りだ」

「おい、まさか…」

「なるほど、やはり卑怯者じゃな」

「どういうこと？」

明久以外は理解出来たようだ

「いいか明久？つまりは4時を過ぎてからの補給テスト、作戦会議、今なら教室の補修、勉強道具の調達は契約違反だ」

「下手すりゃ勉強そのものや教室でだべってること、究極的に言うなら学校にいること自体が違反對象だ」

「そんなめちゃくちな…」

「めちゃくちゃでも屁理屈でも反論出来なけりや立派な論理だ。ようするに雄二のバカが調印結びやがったせいで現況はかなり不利だ」

「…すまん」

流石に雄二も悪いと思ったのか素直に謝る

「過ぎた事は仕方ない。さっさと対策を考えて」「大変だ!」

ちよつとシリアスな雰囲気になっていると、須川が教室に駆け込んできた

「どうしたの? 須川君」

「島田が人質にとられた」

…わお。命知らずな

「なっ!?!」

「…とりあえず状況が見たいな。須川、案内頼めるか?」

「任せてくれ。こっちだ!」

「雄二」

「わかってる。対策は任せてくれ。二度同じ轍は踏まん」

「頼んだ…明久、行くぞ!」

「うん！」

にしても人質ねえ…卑怯ってクラスに伝染すんのかな？

「島田さん！」「美波！」

「吉井！佳史！」

どこの三流ドラマ？ってツッコミはいれないで…

「…残りは二人だが人質で攻めるに攻められないって所か」

「申し訳ないが、その通りだ」

っーか鉄人。呆れるくらいなら止めるよ

「そこで止まれ！それ以上近寄るなら、召喚獣に止めを刺してこの女を補習室送りにしてやるぞ！」

…二人しかいないうちの女子を戦死させて同時に士気も落とそうって魂胆か？

それなら…

「総員突撃用意いーっ！」

「隊長達それでいいのか!？」

いいんだよ。…明久は日頃の仕返しとか考えてそうだけど

「ま、待て吉井!コイツがどうして俺達に捕まったと思ってる?」

「馬鹿だから」

「殺すわよ」

うおう!?!美波から凄まじい殺気が!?

「コイツ、お前が怪我をしたって偽情報を流したら一人で保健室に向かったんだよ」

そりゃ好きな奴が怪我したって聞いたらな…

「島田さん…」

「な、なによ…」

ちよつと顔を赤らめてそっぽを向く美波

なんだ?デレ期か?

「怪我をした僕に止めを刺しに行くなんてアンタは鬼か!」
「違うわよ!」「違うだろ!」

コイツの頭の中を一回覗いて見たい

「ウチがアンタの様子を見に行っちゃ悪いっての！？それでも心配したんだからね！」

「島田さん。それ、本当？」

「明久、何でお前は素直にそう考えられないんだ…？」

「そ、そうよ。悪い？」

ここまでやれば流石に明久も…

「へっ、やっとわかったか。それじゃ大人しく…」

「総員突撃いーっ！」

「「何で（だ）よっ！？」」

わからなかったようだ

「あの島田さんは偽物だ！変装している敵だぞ！」

何をどう考えてそうなった

「おい待てって！コイツ本当に本物の島田だって！」

ゴメンBクラスの奴ら。コイツ本当に本物のバカなんだ

「黙れ！見破られた作戦にいつまでも固執するなんて見苦しいぞ！」

Bクラス 鈴木二郎 & 吉田卓夫 VS Fクラス 田
中明 & 須川亮
英語W 33点 & 18点 VS 65点 & 59点

…死にかけたったのか

「ぎゃあああー…！」

「たすけてえ…！」

おつかれーっす

さて、問題は…

「皆、気をつけろ！変装を解いて襲いかかってくるぞ！」

明久が生きて帰れるかどうかだな

…ま、フォローくらいはしてやるか

「美波、大丈夫か？」

「佳史い…」

あの美波が本気で泣きそうになってるよ…そんなにショックだったのか

「佳史！危ないよ！」

「何言つてんだ？コイツ本物だぞ？」

「…へ？」

一瞬で気の抜けた表情になる明久

コイツ…今俺に合わせればどうにかなったものを…

「美波、教室に戻ろうか？」

「うえーん！佳史いー！」

マジ泣きしながら俺の腰に抱きついてくる美波

…日頃とのギャップが激しすぎだろ

「うえーん…」

「あー…はいはいよしよし」

俺と美波はポカーンとしている明久達を置いて教室に戻った

因みにFFF団はキレた美波の恐ろしさを知っているため、肅正どころか、後で崇められた

「あ、美波」

「…何？」

「一応これ自習中のクラスには戦闘以外は生中継だからな？」

「…え」

「その頃のAクラス」

「……………」

「ゆ、優子さん？どうしたんですか？何かどす黒いオーラが出てますけど…」

「なあに美穂？アタシはいつも通りよ？そう…イツモドリ…フフフフ」

「何でカタコト!？」

「…ねえ代表？どう思う？ボクが思うに…」

「……多分愛子の考えが正解。私も雄二があんな事してたら…」

「あれ？代表Fクラスの代表くんが好きだったの？」

「……………うん」

「佳史い…オボエテナサイヨ…!」

「誰か止めて…」

「（ブルツ）…何だ今の寒気!？」

「佳史どうしたの?」

「いや、大丈夫だ」

ちなみに俺が教室の設備を補修している間にCクラスが敵になったらしい

PS、明久と美波が仲直りしました

…後、何故か俺のファンクラブが出来たらしいです

「さて、帰るか」

「そうだね」

時間も時間なので俺達が帰ろうとしていたとき…

ガラッ

「佳史いるかしら?」

「ん?秀吉?女装なんてしてどうしたの?」

「明久よ、ワシはこつちじゃ」

うん、お約束ですな

「ここにいるけど？」

「ちょっと来てもらえるかな？」ガシッ

え？お願いなのに拒否権ナシっすか？

「さあ、逝くわよ」

「ちよ、待つ…！秀吉！助けてくれ！」

「姉上…流石に「秀吉？（ニコッ）」…すまぬ、ワシは無力じゃ…
！」

「うおい！諦め早すぎるだろ！だつたら雄二！」

「佳史…諦めて逝ってこい」

「雄二いいいいーっ！！」

仕方ない。短い人生だったと諦めよう…

「みんな…生きて帰れたらまた明日弁当食おうな…！」

「くっ…！佳史、お主の事は忘れぬぞ…！」

「アンタ達の中でアタシはどうなってるのよ…！」

そしてそのまま俺は連れていかれそうに…

「って待て待て！ 買い物でも何でも付き合ってやるから関節技だけは勘弁して下さい！」

ピタッ

「何でも…？」

「今なら大体は！」

何物も命には代え難い！

「じゃあ…賭けをしない？」

「賭け？」

そんなんでもいいのか？

「そ。どうせ最終目標はAクラスなんでしょ？ だったらFクラスが勝ったらアンタの勝ちでAクラスが勝ったらアタシの勝ち。負けた方は勝った方の言うことを何でも（・・・）一つきくこと」

何でも… ってめちゃくちゃヤバいんだが… 主に俺の貞操と人生が

昔から、コイツは何故かやたらと俺の寢床を襲ってくる

だから毎年寮が閉まる長期休みの木下家への居候はかなりデンジャラスだ

「…勝てばいいんだな？」

「そうよ」

「…わかった」

「つーか今の俺に拒否権ないし

「ホント？嬉しいな」

「こっちは泣きたいよチクショー」

「と、言うことで俺と優子の賭けは成立した

第七話

『日本独自の技術で、円の動きを取り入れた、主に護身術として使われる武術を答えなさい』

姫路瑞希の答え

『合気道』

教師のコメント

「正解です。姫路さんも体を鍛える意味でも習ってみてはどうでしょう?」

木下優子と島田美波の答え

「関節技」

教師のコメント

「武道じゃありません」

雑賀佳史と吉井明久の答え

「…関節技」

教師のコメント

「間違いです。…しかし何故君達の答えから哀愁を感じるのでしょうか？」

土屋康太の答え

「四十八手」

教師のコメント

「そろそろ西村先生と大島先生に徹底的指導をお願いしておきます」

「昨日言っていた作戦を実行する」

朝のホームルームが始まるなりそんな事を言い出した雄二

「作戦？」

「Cクラスを敵にしない為の作戦だ」

「そうか」

…何故俺の冷や汗が止まらないんだろうか

「それで何すんの？」

「秀吉にコイツを着てもらおう」

そう言っただけで雄二が紙袋から取り出したのは文月学園の女子生徒の制服
オトナのお友達にも大人気の代物…らしい（ムツツリ商会調べ）

…雄二、お前ついにそんな趣味の方向に…

「佳史、そんな目で見るな。地味に傷つく。後俺にそんな趣味は無い」

「それは重畳」

「別に構わんがそれでどうするんじゃ？」

いや、構え！（俺が）優子に殺される！

「って待て！もしかして作戦って…」

そこまで言っただけで、雄二はニヤリと笑って

「そうだ。秀吉には木下優子としてAクラスの使者を装ってもらおう
…というわけで秀吉、用意してくれ」

「うむ」

「ちょ、待て秀吉！考え直せ！優子にころムゲウ！？」

一瞬で明久と康太に口をふさがれる

「……佳史、これだけは邪魔させない……！」

「クラスの為なんだ。……諦めてよ」

その後すぐに康太にスタンガンをくらい、意識を手放した……

「……は一人で頼むぞ秀吉」

む……ここは……

「あ、佳史、目が覚めた？」

「明久……ここは？」

「……Cクラス前」

「なにぃ！？」

「静かにしろ。秀吉が教室に入るぞ」

くっ！せめて秀吉が学校バージヨンの優子を演じてさえくれれば…

「静かになさいっ、この薄汚い豚ども！」

ああ…終わった…

もうすでに震えが止まらない…！

「な、何よアンタ！」

「話し掛けないで！豚臭いわ！」

なんだよ、もうツツコミどころしかねーよ（投げやり）

「アンタAクラスの木下ね？ちょっと点数良いからっていい気にな
ってるんじゃないわよ！」

そーですね（適当）

「私はね、こんな臭くて醜い教室が同じ校内にあるなんて我慢なら
ないの！貴女達なんて豚小屋で充分だわ！」

「なっ！言っに事欠いて私達にはFクラスがお似合いですって！？」

Fクラスは豚小屋じゃねえぞ？…多分

「手が穢れてしまうから本当は嫌だけど、特別に今回は貴女達を相
応しい教室に送ってあげようかと思うの」

秀吉の野郎、間違いなく日頃の恨みも込めてやがるな

「ちょうど試召戦争の準備もしているようだし、覚悟しておきなさい。近いうちに私達が薄汚い貴女達を始末してあげるから！」

あはは…終わった。終わったよ…俺の人生…

「これで良かったかのう？」

めちゃくちゃスツキリした声の秀吉が近づいてくる

「ああ、素晴らしい仕事だった」

何でこんな事になったんだろなあ…

「…ん？ちよつと雄二！佳史が某ボクサーみたいに真っ白なんだけど！？」

「何！？急いで起こせ！佳史は今回の戦争には必須だ！」

「了解！」

そつかあ、あの卑怯者が卑怯な作戦たてやがったせいかな…

「クツクツク…」

「……スタンガンが効かない」

「隊長！佳史が笑い出しました！スタンガンも効きません！」

「根本…」

「え？」

「根本…コロス…」

俺の命を窮地に陥らせた罪…きつちり晴らしてもらおう…！

「」「」「」
……………」

「…ねえ、雄二」

「…何だ」

「僕達、なんか目覚めさせてはいけないモノを起こしちゃったんじゃないか…」

「…言うな」

「……反省」

「ドアと壁をうまく使っくんじゃ！戦線を拡大させるでないぞ！」

廊下に秀吉の声が響く

その後Bクラス戦が開始され、Bクラス前で膠着状態になっている

雄二が俺達に課した作戦はただ一つ

『敵を教室内に閉じ込める』

その作戦に従い、教室前を包囲しているのだが…

「……………っ！（オロオロ）」

瑞希の様子がおかしい

「右側出口、押し込んだ！」

「ホウキを使って完全に封鎖しろ！三、四人掛けてもいいから絶対に開けるな！」

これで俺が左側を張れば問題ない

しかし、あの慌てっぷりは気になるが…

「Bクラス吉野が現国勝負を申し込みます！」

「雑賀佳史が受ける！」

まあ、そっちは明久に任せよう

Bクラス	原田芳樹	VS	Fクラス	雑賀佳史
現代国語	0点	VS	218点	

「はあ…はあ…」

もう何人倒しただろうか。十人を超えたあたりから数えるの止めたしな

「本隊が来たぞ！」

「大丈夫か佳史！？」

「遅えよ…死ぬかと思ったっての」

ちよつと冗談混じりで悪態をつく、雄二が小さな声で

「なんとか3時まで耐えてくれ。そうすれば俺達の勝ちだ」

「…しゃあねえな。やってやるよ」

現在、2時55分

ドオオオン

「お前らいい加減諦めろよな。昨日から教室の出入り口に人が集まりやがって…暑苦しいことこの上ないっての」

Bクラスから腹立つ声が聞こえてくる

「どうした？ギブアップか？今なら罰ゲーム2つで許してやるぞ？」

根本を挑発しながらまた一人倒す。とうとう現国が200点をきった

ドオオオン

「はあ？ギブアップするのはそっちだろ？」

「無用な心配だな」

「そうか？頼みの綱の姫路さんは調子が悪そうだし、雑賀はそろそろ限界みたいだぞ？」

…やっぱりコイツが瑞希になんかしたのか

「…お前ら相手じゃ役不足だからな。休ませておくさ」

「俺が限界？冗談拔かせ。その内味方がいなくなって焦んなよ？」

とは言ったものの割とヤバイ。せめて教科が変更出来ればいいんだが…

「はっ、口だけは達者だな！負け組代表さんよオ！」

「負け組？それがFクラスの事ならもうすぐお前が負け組代表だな」

ドオオオン

「…さつきからドンドンうるせえな。何かやっているのか？」

「どうだろな？人望人気信頼信用が一切ないお前に対する嫌がらせじゃないか？」

ついに残り100点をきった。

…急げ明久！

「けっ、言ってる。どうせもうすぐ決着だ。お前ら！さっさと雑賀をやってしまえ！雑賀さえやれば後は雑魚だ！」

「……態勢を立て直す！一旦退くぞ！」

雄二の言葉に一瞬疑問符が浮かんだがすぐに切り替えてBクラスのやつを戦死させ、すぐさま召喚範囲から抜ける

…残り68点。ギリギリだったな

「どうした！散々ふかしておいて逃げるのか！」

三十六計逃げるに如かずって昔の偉い人が言ってたのをしらんのか？

「後は頼んだぞ、明久」

3時ジャスト！！

「だああーっしやああーっ！…！」

ドガアアアン

明久達奇襲部隊がBクラスの壁を破り、根本に特攻する！

「今だ！全員反転！Bクラスの奴らを一人残らず足止めしろ！」

「Fクラスの雑賀佳史がBクラス近衛部隊全員に古典勝負を申し込む！」

「承認します」

Bクラス 近衛部隊×6 VS Fクラス 雑賀佳史
古典 平均168点 VS 688点

「なっ!?!」

「まだあんな切り札を!?!」

俺の点数を見てざわつく近衛部隊

「俺の一番の得意教科は古典なんだよ!?!まあ、何はともあれ!?!」

「ムツツリーニイー!?!」

そんな声が聞こえたと思うと、康太が根本を強襲していた

「...THE END。戦争終結だ」

Bクラス VS Fクラス

Fクラスの勝利

「うう…痛いよう、痛いよう…」

当たり前だろう。素手でコンクリ壊したようなもんなんだから

「明久、なんともお主らしい作戦じゃったな」

「で、でしょ？もつと褒めてもいいと思うよ？」

何を調子乗ってんだコイツは

「後の事を一切考えず、自分から退学への階段を上る、男気溢れる素晴らしい作戦だな」

「その通りじゃ」

「…遠まわしにバカって言ってない？」

堂々とバカって言ってますが何か？

「ま、それが明久の強みだからな」

なんという不名誉な称号！

「…さて、それじゃ嬉し恥ずかし戦後対談といくか」

「だってよ。な、負け組代表サンよお？」

「……………」

さっきまでの態度が嘘のように床に座り込んでいる根本

ま、自業自得だな

「本来なら設備を明け渡してもらい、お前らには素敵な卓袱台をプレゼントするところだが、特別に免除してやらんでもない」

雄二の言葉にBクラスFクラス問わず騒ぎ始める

「落ち着け。俺達の目標はAクラスだろ？通過点で満足すんな」

「そうじゃのう」

「まあ…Bの代表次第だけどな」

直にFクラスの皆は静かになる

「…条件はなんだ」

「条件？それはお前だよ。負け組代表さん？」

「俺、だと…？」

「ああ。お前には好き勝手やつてもらったし、正直去年から目障りだったんだよな」

「俺の死因を作り上げやがって…！」

周りのフォローは一切ナシ。流石嫌われ者

「そこでBクラスに特別チャンス！」

「Aクラスに行つて試召戦争の準備が出来てると宣言して来い。そうすれば今回は設備に関しては見逃してやろう。ただし宣戦布告はするな。あくまでも戦争の意思と準備があるただけ伝えるんだ」

「…それだけでいいのか？」

むしろそれだけで済むと思つてんのか？

「ただし！Bクラス代表がコレを着て言つた通りに行動すればな！」

俺が取り出したものは女子の制服（秀吉使用済み）

これはさつき雄二と考えた罰ゲームだったりする

「ば、馬鹿なことを言つな！この俺がそんなふざけたことを「つべこべ言わんと着とけっ！」あべしっ！？」

某キャラクターのように崩れ落ちる根本

「Bクラスの野郎共！（根本を）やる気は十分か！」

「「「おおおおーっ！」「」」

「…佳史、容赦ないね」

「……………不憫」

何のことやら

「さて、俺はそろそろ帰るわ！」

「お疲れ様、佳史」

「明日はAクラス戦だからな。遅れるなよ？」

「…雄二、お前何言ってるんだ？」

「ん？」

…これは本気で忘れてやがるな

「明日は寮対抗の球技大会だぞ？」

「「「…え」「」」

…全員忘れてたのかよ

キャラ設定

主人公

雑賀佳史

サイカ ケイジ

2 F

本作の主人公的存在。基本的に冷静沈着…というよりただのルーテ
ンション（低血圧・低体温・低血糖）。

頭は霧島翔子より少し上位。実質学年主席だが、目立つのが嫌いな
のであまり本気を出してテストをやらない。

明久とは小学校の時のお隣で、木下姉弟とは中学校からの付き合い。
親が木下家とかなり仲良しで、優子は佳史に惚れている。

料理上手で、和食は高級料亭で出せるレベルである。

得意教科：古典（600～750）現国（450～500）

苦手科目：保健体育（～5）

その他は平均して380～420

召喚獣

真っ黒なコートに大小二本の刀を腰に差している（バ○ラの片倉小
○郎のコートが黒、顔がティルズのク○トス）

腕輪：？？？

オリキャラ

風祭将

カザマツリ ショウ

2 A

佳史とは中学校からの付き合い。佐藤美穂と幼なじみで、主に相棒的な存在になっている

ノリがいいが、女癖は悪い（寮長の影響）

オリキャラなのにあんまり出番が来ない不憫なキャラ

得意教科…保健体育（460）～480）、物理（350）～450）

苦手科目…なし

その他の平均…320～360

召喚獣

カンフー服に鉄板が着いたような服にトンファー（顔はまんまりボ
ーンのデュー○）

雑賀唯

長月幼稚園年長

佳史の妹。佳史が高一の時まで佳史と二人暮らしだった。

現在は木下家で預かってもらっている

ずっと貧乏な生活を送っていて、一人の時間が多かったせいか、ワガママや駄々をこねるなどは全くと言っていいほどない（佳史にはたまに見せる）

かなりのブラコン

寮の説明

イケパラと同じく三寮体制

寮長も原作と同じく

一寮…天王寺恵（3 E）

二寮…難波南（3 B）

三寮…オスカー・M・姫島 姫島正夫（3 A）

原則として文月学園の生徒はいずれかの寮に所属する

長期休みには寮は一時閉鎖となる（帰省を促すため）

部屋は基本的に二人部屋となる

寮対抗のイベントはぶっ飛んだものも多い

寮対抗のイベントのみ、学園長の言う事は絶対

第八問

『good及びbadの比較級と最上級をそれぞれ書きなさい』

姫路瑞希の答え

「good better best
bad worse worst」

教師のコメント

「その通りです」

雑賀佳史の答え

「good better best
bad worse worst」

教師のコメント

「真面目に答えてくれて先生は嬉しいです」

吉井明久の答え

「good gooder goodest」

雑賀佳史の答え（続き）

「明久の答えは俺が教えました（笑）」

教師のコメント

「前言撤回します。人を使って微妙にボケないで下さい」

土屋康太の答え

「b a d b u t t e r b u s t」

教師のコメント

「『悪い』『乳製品』『おっぱい』」

現在、2寮のメンバー（学年は関係ない為全員）が寮の食堂に集まっている

俺は雄二、霧島、優子と固まって後ろの方で見ている

…いや、普通に暑いんだよ

「おっし！お前ら！今年も来たぜこの季節が！」

『イエーイ！！』

「今年の優勝商品は…」

『ゴクリ…』

「優子、去年は何だった？」

「えーっと…確か各部屋にマッサージチェアじゃなかった？」

いや、聞いてんのに聞き返されても…

つか賞品何か聞き逃した

「今年の種目は男子がサッカー、ドッジボール、女子がバレーボールとテニス、んで、男女混合でバスケットだコノヤロー！」

『うおおおお！！！！』

めちゃくちゃ湧く男子

…こっちの気も知らずに…

(…わかってるな佳史？)

（ああ…）

（（バスケット以外を引くぞ！んで翔子（優子）から逃げる！）（

寮イベント限定の同盟発動！

「いいな…どうせ種目は早い者勝ちだ。だから…」

ガシッ×2

「「…あり？」」

「さーて、私達はバスケットに出るわよ」

「確定！？確定ですか！？」

「……雄二。一緒じゃないとダメ」

「ちょっと待て！俺はサッカーがいぎやあああああ！！！」

反論、ダメ。絶対。

だって霧島も優子も何故かスタンガン持ってんだもん

「…雄二生きてるか？」

「…なんとか」

男って…無力だ…

「ちなみにだが…」

そんな風に何もかも諦めて大人しく引きずられていると、突然天井から掲示板的なものが降りてきた

「今回のバスケの選定方法はルーレットだからな」

「ふざけんな！」

「横暴だ！」

「こっちは確実に滑り込める位置にいたんだぞ！」

難波寮長がそう宣言すると、近くにいた二のFの男共が寮長に殴りかかる

けど…

本当にありがとうございます！難波寮長！

雄二も同じ意見だったようで、二人して見事な90。お辞儀を披露した

「代表、今年はルーレットだって」

「……残念。力ずくなら早いのに」

「おい難波。そろそろ時間だ。出場者を決め始めろ」

「ういーっす」

これまた突然鉄人が食堂に入って来て、ルーレット開始を指示する

「…後だな、毎年の事だが多くの観客が入っている。無様な試合はみせるなよ」

「「「……………」」」

「…と、学園長が言っていた」

『じゃあしょうがねえなあー』

前々から思ってたんだが、何で寮対抗戦の時だけ学園長が最強になるんだろうな？

「さーって！早速行くぞ！記念すべき一人目は…！」

そんな寮長のコールと共にどこからともなくハイジャンの飛ぶ前みたいなの拍手が巻き起こる

「コイツだっ！」

二年Fクラス

坂本雄二

「……………」orz

「…ドンマイ、雄二」

「ま、まだ希望はある！翔子さえ一緒にならなければ…」

「二人目っ！」

二年Aクラス

霧島翔子

「……………」orz

「…ドンマイ、雄二」

流石に哀れすぎる

「……雄二、私達の愛の勝利」

「誰と誰の間だ！」

「……勿論私と雄二」

「お前との間に愛が芽生えた覚えはなぎやああああ！！」

「おい、また夫婦喧嘩やってるぞ」

「全く、羨ましい……！」

ちなみに雄二と霧島は2寮では既に夫婦扱いである

「次は誰かな」

…寮長、さては狙ってましたね？

物凄い悪い笑顔してますよ

二年Cクラス

黒崎一心

『……………誰？』

「誰とか言つな！」

いや、モブだしお前

「さて、モブは放って置いて次行くぞ」

「寮長！？」

しばらく騒いでいたが、どうやら諦めたらしい

二年Aクラス

木下優子

「んだよ、また人妻かよ」

「今年はハズレだな」

「木下はどうせ雑賀以外になびかんしな」

「誰が誰の妻だ！まず優子と籍入れた覚え無いしそもそも付き合つてすねえしたただの幼なじみだし！後諦めんなよ！頑張ればきっと優子もなびくさ！」

「……雑賀。優子が凄く落ち込んでる」

「今はそれより誤解を解く方が先だ！」

チョンチョン

誰かが俺の肩をつつく

「誰だよ！今忙し…寮長？」

「いや、熱弁してるとこ悪いんだけどさ……」

？寮長がハッキリものを言わないなんて珍しいな

「何かあつたんですか？」

「いや、それがさ」

掲示板を指差す寮長

つられてその先に目を向けると…

二年Fクラス

雑賀佳史

死刑宣告が張り付いていた

「お前の名前、引いちった」

言葉に、できな

視界の端で、さっきとは打って変わってはしゃいでいる優子が目に映った

文月学園球技大会

男女混合バスケットボール

第1寮選抜

吉井明久

土屋康太

島田美波

天王寺恵

工藤愛子

控え

小山友香

中林宏美

第2寮選抜

坂本雄二

霧島翔子

黒崎一心

木下優子

雑賀佳史

控え

難波南

玉野美紀

第3寮選抜

木下秀吉

小暮葵

須川亮

オスカー・M・姫島

姫路瑞希

控え

常村勇作

根本恭二

尚、試合は15分ハーフの前後半の総当たり戦とする

交代はハーフタイムのみ。しかし、怪我等はこの限りでない

非紳士的行為は警告とし、退場は7分とする

翔けよ、若人！！by西村宗一

…鉄人、アンタ何歳だよ

あつという間に昼が過ぎ、第一試合

「…君達、30メートル以上全力疾走した事ある？」

「いえ、ないです…」

「ごさいませんわ」

「ジーザス!!」

「…正夫が相手なら勝てるな」

「油断すんなよ？秀吉も須川もいるんだからな…正夫はしらんが」

「そこっ！正夫っていうな！」

敏感だな

「佳史、わかってるわね？」

「ああ…ザックリ勝って「私達のラブラブ」ぶりを観客全員に見せつけるのよ!」「うおい!目的違う!目指してる方向が根本的に違う!」

「大丈夫よ！私は佳史以外に初めてを渡す気はないから／＼／」

「おゝい、玉野ゝ！コイツと代わってくれゝ！なんか貞操の危険を感じるからゝ！」

マジで

「はい！お兄様！お兄様のためなら喜んで！」

「チクシヨウ！コイツも敵じゃねーか！」

Bクラス戦以来何故かできた俺のファンクラブは全員俺を『お兄様』とか呼ぶ！

「だつたら寮長！」

「君、可愛いね。どこから来たの？」

「寮長おおおお！！！」

もうこの場に味方はいない…！

「……雄二、頑張る」

「おう。期待してるぞ」

「……違う。雄二も頑張る」

「…そうだな。どうせやるんだ。楽しむとするか！」

「……その意気」

くそう！雄二ですら青春してやがるし！

「…何故が放って置けばその内勝手に勝てそうな気がするのじゃが」

「気のせいだ」

「あのー…そろそろ位置について欲しいんですが…」

『あ、スイマセン』

今までののは全部入場して、アップ中の会話だったりする

ピーッ！

そうして試合が始まった

「全員マンマークじゃ！寮長は雄二、須川は姉上、姫路と小暮先輩は霧島ともう一人を頼む！」

「試合前に話した通りに行くぞ！」

試合前に話した内容はこの通り

・雄二は基本的にリバウンドキャッチ

・霧島と黒崎は適当に動き回ってボールが来たら俺か優子に回す

・俺と優子は好きにやる

つまり…俺と優子の完全速攻！

まずは難なく雄二がジャンプボールを取り、優子に回す

優子はすぐに俺に渡して敵陣に切り込む

「須川！」

「わかってる！マーク張ってるぞ！」

「おいおい秀吉、余所見してる暇なんか無いぞ？」

秀吉が優子を気にしている間に俺は秀吉を抜き去り、正夫をかわしてゴールに迫る

「くっ！通すか！」

優子のマークを外した須川が俺を止めにくるが…

「優子！」

「OK！」

シュツ…パッ

優子のスリーポイントが決まり、速攻で先制

「なんだよあいつら…」

「コンビネーションがハンパじゃねえぞ…」

幼なじみなので

「ナイツシュ！」

「じゃあキスし「断る」…イジワル」

そんな掛け合いをしながらハイタッチ！

相手ボールで試合が始まるが、俺と優子が秀吉と須川を徹底マークしているので、向こうはパスを回すばかりで一向に攻められない

だがそんな時、観客席から…

「…マサオ！マサオ！マサオ！マサオ！…」

突然の正夫コール

その声を聞いた正夫は…

「正夫って…言うなああああああ！…」

切り込んできたかと思うと、いつの間にかシュートを決めやがった

…恐るべし正夫コール！！

そしてずっとそんな感じの点の取り合いが続き、ついに同点で残り30秒を切った

「集中力を切らずで無いぞ！最悪フリースローまで持ち込むのじゃ！」

秀吉が指示を出す隙について、俺が切り込む

即座に、試合に慣れたのか、姫路と先輩が俺を止めに来る

優子は須川と正夫にマークされている

…けど！

俺は先輩の股下からボールを通す

しかし、二人が邪魔で前に出れない

…後5秒！

「…これはフリースローですかね？」

不意に先輩がそんな事を言う

「…いえ、俺達の勝ちですよ」

…なあ、雄二？」

ブザーが鳴ると同時に雄二のレイアップが決まり、俺達の勝利が決まった

第九問

『女性は（ ）を迎えることで第二次性徴期になり、特有の体つきになり始める』

姫路瑞希の答え

「初潮」

教師のコメント

「正解です」

吉井明久の答え

「明日」

教師のコメント

「随分と急な話ですね」

雑賀佳史の答え

「アレだよ、ホラ…アレ」

教師のコメント

「結局わからなかったんですか」

土屋康太の答え

『初潮と呼ばれる生まれて初めての生理。医学用語では生理のことを月経、初潮のことを初経という。初潮年齢は体重と密接な関係があり、体重が…（以下略）』

教師のコメント

「詳し過ぎです」

「よくやったなお前らっ！カッコ良かったぞ！」

試合が終わってすぐに食堂に戻ると、寮長が労いの言葉をかけてくる。ちなみに競技と競技の間は選手は基本的に寮ごとの集合場所に集まる事になっている。

「サッカーは2寮の勝ちでバレーは1寮の、テニスは引き分けでドッジは（奇跡的に）3寮が勝ったからな。このバスケで優勝が決まる！」

凄く入れ込んでるように話す難波寮長

…俺の見間違いじゃなければアンタ試合そっちのけで観客席でナンパしてたよな？

月夜ばかりと思っちなよ…！

『坂本モゲロ』

『雑賀モゲレ』

「何故に！？つーか何でだよ！？」

『るせいっ！！女子にキヤーキヤー言われて羨ましいんだよチクシヨー！！』

『雑賀に関してはさっさと木下と籍入れてしまえ！！』

『そうだそうだ！人生の墓場に浸かってしまえ！』

2寮男子一同魂の叫び

「お前ら本当に欲望に忠実だな…佳史に関しては否定できんし」

「つてオイ雄二！？」

まさかのここに来て裏切りか！？

（テメエ！どういっつもりだ！）

(…佳史、アレ見る)

雄二が指差す先には、『優子の手助けをしないと…』と書かれたテレビで使うようなカンペを持つ霧島がいた

「…………アレを見て、俺が逆らえとでも？」

「……………すまん」

「…………優子、婚姻届ならこれをあげる」

「あら、ありがとう代表。そうね、そろそろ届け出とくべきかしら？」

『やゝれ！やゝれ！』

『書け！書け！』

「ちょうど実印も持ってるし…」

「待て待て待て待て！とりあえず煽るなバカ共！霧島は何で婚姻届なんか持ってるの！？んで優子！俺は同意してないし、そもそも16だし（遅生まれ）！っ！かどうやってウチの実印盗み出したんだ！？」

確か寮の俺の部屋の金庫の中に入れた金庫の中に保管してたはず！

「普通におばさまに頂いたんだけど？」

「あのポケ親ああ！！！」

そんな風に取り乱していると、雄二が俺の肩に手を置き

「…ようこそ、こちら（結婚で脅迫される側）の世界へ」

腹立つくらい清々しい笑顔でんな事をのたまってくれました

「嫌あああああ！！！！」

あれ？なんかデジャヴ

そんなバカ騒ぎの間に第二試合が終了

第1寮 VS 第3寮

172 VS 8

この時点で3寮の最下位決定！

「いいな？相手はスポーツ系の第1寮だ。弱点という弱点はない」

現在、最終ミーティングです

「明久とムツツリー二は勿論、天王寺先輩、工藤もスポーツ万能だし、島田の運動神経も悪くない。ハッキリ言って不利だ」

…だからこそ乱戦に持ち込む！そこで鍵となるのは木下姉と佳史、俺だ。防御は捨てて、攻撃に注ぎ込む！攻撃こそ最大の防御だ！一気に吞むぞ！」

「「「「応!!」「」」」」

「第2寮、出陣るぞ!」

「「「「しゃあーっ!!」「」」」」

「…あれ?寮長俺じゃね?」

この際、寮長の呟きはスルーしとこう

「勝負だ!佳史に雄二!」

「……負けない」

「それはこっちも同じだ。やるからには勝つ!」

そんな事を言い合って試合は始まった

雄二が再びジャンプボールに競り勝ってこっちボールで試合が始まる

マークなんかする時間は与えない!まずは速攻で先取点をとる!

「甘いよ佳史!」

てつきり指示が無いので動いていないと思った明久にスティールされ、カウンターで先取点を取られる

「甘いよ？ボク達が試合前に何の話し合いもなく本番に出るわけ無いじゃん」

…向こうの頭脳は工藤か。やられたな…

「もうマークする相手は決まってるからね。僕だって迷わないよ」

「…上等！」

そこからは個人技の応酬だった

明久は切り込みからのレイアップを披露し、康太は地味に素早くパスを回す

雄二はダンクを、優子はスリーポイントを決め、俺は確実にゴールを決める

気付けば試合は後半だった

残り三分

1 寮対2 寮 130対126

「慌てんな！確実に決めてくぞ！」

慌てんな、とは言いながら、俺は速攻で敵陣奥に切り込む

慌てた天王寺先輩が優子のマークを外して俺に迫る

「ダメです！先輩戻って下さい！」

「む？」

勿論その隙を逃すはずなく、優子にボールを回し、スリーポイントが決まった

130対129

「そのままパスを回して！持ちすぎは厳禁だよ！」

工藤が指示を飛ばし、その通りに明久達が動く

「あ、姫路がチアの格好で観客席にいる」

「え！？どこ！？」

…まさか引つかかるとは思わなかった

「貰いつ！」

「あ、佳史！卑怯だぞ！」

いや、あんな速攻で嘘だと分かる嘘に引つかかれてもな

…半分冗談でちょっとでも意識が逸れたらな〜って思ったただだったんだが

すぐに優子に回して、ゴールまで走る

…残り15秒…行けるか！？

優子がシュートを放つが、天王寺先輩の指の先がかすかにボールに当たってコースがずれる

…マズい！これを逃したらフリースロー…そうなたら霧島がいる
こっちは絶対的に不利！

そんな事を考えていたら、無意識にボールに向かって飛んでいた

『雑賀あー！行っちゃえええええ！！』
『お兄様ー！！』

そしてそのままボールを空中で掴み、そのままゴールに叩き込んだ
ビーン！

『……………』

時が止まったように静まり返る体育館

「…やった」

『よっしゃあーっ！！』
『やりやがったなお前らーっ！！』
『2寮最高だあーっ！！』

歓喜に湧く2寮の面々

「あーあ、負けたあー！」

「…………無念」

「流石Fクラスの知将コンビだね」

明久、康太、工藤の順に声を掛けられる

「にしても最後のアレはズルいよ…」

「佳史、何をしたんだ？」

「え？いや、観客席で姫路がチアの格好してるって言ったただけなんだけど…」

「「明久（吉井君）が悪いな（ね）」」

「まさかの全員敵！？」

「吉井貴様：そんな煩悩に振り回されるからそんな畏に引つかかるのだ！」

「え！？寮長待つて！その竹刀は一体！？」

「喜べ。今日から一週間お前を心身共に鍛え上げてやる。家に帰れると思うなよ？」

「嫌あああああ！！！」

うん、デジャヴ

今日から明久は一週間鬼の補習ならぬ鬼の修行（プレゼンテッド
バイ 天王寺）だな

「…にしても今年の優勝賞品って何なんだ？」

「さあ？去年がマツサージチエアだったから液晶テレビ（地デジ対応）とかそんなじゃねえか？」

「お疲れお前ら」

雄二と賞品について話していると、後ろから寮長が肩を組んできた

「あ、寮長。今年の優勝賞品って何ですか？」

「あれ？お前ら知らなかったの？てつきりやつと素直になったもんだと……」

素直？何の話だ？

「今年の優勝賞品：如月グランドパークのプレオープンペアチケットだぞ？」

一枚だけだがな、と付け加えて去つて行く難波寮長

「ええええええええええ！！！？？」

多分勝って後悔するのはこれが最初で最後だろう

第十問

『（ ）年 キリスト教伝来』

霧島翔子の答え

「1549年」

教師のコメント

「正解。特にコメントはありません」

坂本雄二の答え

「雪の降り積もる中、寒さに震える君の手を握った1993」

教師のコメント

「ロマンチックな表現をしても間違いは間違いです」

雑賀佳史のコメント

「お前本当にどうしようもねえな」

「球技大会翌日」

「…まずは皆に礼を言いたい。周りの連中には不可能だと言われていたにも関わらずここまで来れたのは他でもない皆の協力があったことだ。感謝している」

雄二がいつものように教壇に上がり、突然礼を言った

「ゆ、雄二、どうしたのさ。らしくないよ？…後何でそんなにやつれてるの？佳史も」

「ああ、自分でもそう思う。だがこれは偽らざる俺の気持ちだ。…後そつちには触れてくれるな。頼むから」

「思い出したくもない…」

あの後優勝賞品のペアチケットは霧島と優子の手に渡り、俺達が互いに押し付けあって、一悶着あったんだ

…結局女子側が話し合いで決めるとか言い出したから気が気でない
ああ、ヤバい

「と、とにかく！ここまで来た以上、絶対にAクラスにも勝ちたい。勝って、生き残るには勉強すればいいってもんじゃないという現実を教師共に突きつけるんだ！」

雄二の言葉に一齐に湧くクラスメイト達

…なんかこういう一体感も嫌いじゃないな

「皆ありがとう。そしてAクラス戦だが、これは一騎打ちで決着を着けたいと思っている」

ザワザワザワザワ…

流石にこの話は予想していなかったのか、ざわめく面々

『どういうことだ？』

『誰と誰が一騎打ちするんだ？』

『それで本当に勝てるのか』

「落ち着いてくれ。それを今から説明する…やるのは当然俺と翔子だ」

まあ、クラス間の戦争の一騎打ちだからな。妥当だろう

でもなあ…

「バカの雄二が勝てるわけなあああ！？」

偶然ハモった俺と明久にカッターが飛んでくる

俺はなんとか避けたが、明久には少しかすったように血がでている

…いくら何でも戦友を殺そうとは…

「次は耳だ」

どうやら俺達は他人以上知り合い未満らしい

「まあ、明久の言うとおり確かに翔子は強い。まともにやりあえば勝ち目は無いかもしれない」

じゃあキレんなよ

「しかしそれはDクラス戦もBクラス戦も同じだったはずだ。まともによりあえば俺達に勝ち目は無かった。今回だって同じだ。俺は

翔子に勝ち、FクラスはAクラスを手に入れる。俺達の勝ち揺るがない！」

…不思議だな。他の奴がこんな事を言ってもバカにされて終わりだろうが、雄二が言つと本当にやれそうな気がする

「俺を信じて任せてくれ。過去に神童とまで言われた力を、今皆に見せてやる」

『おおおーっ！！』

「…だが雄二、どうやって霧島に勝つつもりだ？正直言っであいつに弱点なんざねえだろ？」

霧島はAクラスの代表。つまりは学年主席

二年で一番成績がいい奴だ

「大丈夫だ。ちゃんと作戦はある」

ほうほう

「今回の一騎打ちではフィールドを限定する。そしてその教科は…日本史だ」

「日本史？」

「ああ。ただし内容は限定する。レベルは小学生程度、方式は百点満点の上限あり。召喚獣勝負じゃなく、純粹な点数勝負とする」

満点前提の注意力勝負？何か雄二らしくない作戦だな…

「でも同点だったらきつと延長戦だよ？そうなるとブランクのある雄二には厳しくない？」

「それにそもそも面倒臭がりのお前が確実に満点を取れるのか？」

「おいおい、あまり俺を舐めるなよ？いくら何でもそこまで運に頼り切ったやり方を作戦と言うものか。後佳史。喧嘩なら買うぞ？」

いや、純粹に心配してんだが…

「つーか霧島なら気を抜いても小学生レベルなら楽勝だろ？」

「だろうな」

「あっさり認めるのう…」

「何なのお前！？バカなの？死ぬの？」

「よし、お前後で体育館裏来い！…俺がこのやり方を取った理由は一つ。“ある問題”が出ればアイツは確実に間違えるからだ」

『ある問題？』

「雄二よ、勿体ぶらずに言ってくれんかの？」

ついに秀吉がしびれを切らした

「その問題は…“大化の改新”」

大化の改新で小学生レベルとすると…

「何年に起きたか、とか？」

「お、ビンゴだ島田。その問題が出れば俺達の勝ちだ」

「…明久、大化の改新は？」

「あまり僕をバカにしないでよ。『鳴くよウグイス大化の改新』だから794年だよ！！」

その時、確かに時間が止まった

「明久、大化の改新は645年じゃ」

「バカだバカだとは思ってたが…まさかここまで酷いとは…」

「見ないで！そんな目で僕を見ないで！（泣）」

無理ッス。

「…こんな問題は明久くらいしか間違えない。…だが翔子は間違える。そうなれば俺達の机は…」

『システムデスクだ！！』

ま、雄二がちゃんと復習すれば問題ないか

「あの、坂本君」

ん？瑞希が意見なんて珍しいな

「何だ姫路？」

「霧島さんとはその…仲がいいんですか？」

…さて、逃げるか

「ああ、アイツとは幼なじみだ」

「総員狙ええっ！」

バカだな雄二。Fクラス（こいつら）の前でそんな事言えば即処刑に決まってるんだろ

「なっ！？何故明久の号令で一斉に構える！？」

後少しで脱出できる…！

「黙れ男の敵！！Aクラスの前にキサマを殺す！！」

「俺が一体何をしたと！？」

ヤバイ。ついに明久達から障氣的なものが漏れ出した！

「遺言はそれだけか？…待つんだ須川くん。靴下はまだ早い」

とことん容赦ねえな

「待て！それを言うなら佳史も木下優子の幼なじみだぞ！」

『殺せええつ！！』

「なっ！？クソ雄二！俺まで巻き込むな！！」

「うるせえ！こうなったら道連れだ！」

『秀吉と幼なじみと言うだけでも許し難いのに、あまつさえその姉とも幼なじみだと！？』

まず秀吉と幼なじみと言う時点で気付けよ！

くっ！仕方ない！

「戦略的てっ たうおおおおっ！？」

「……逃がさない」

扉が康太の投げた文房具で悲惨な事に…

「ま、待て康太！話せばわかぬおおおおっ！？」

「……問答無用！お命頂戴！」

…程なく、俺は捕まり、雄二のように磔にされた

カンッ

「これより、異端審問会を開始する」

「離せ須川！話せばわかる！」

「そうだ！暴力では何も解決しない！」

俺と雄二が必死で須川に解放を求め^{リアルに}るが…

「とりあえず、被告の罪を」

「「無視か！？」「」

こうなります

「はっ！被告、坂本雄二と雑賀佳史（以下、甲と孔とする）は、Aクラスの霧島翔子と木下優子（以下乙と劉）とそれぞれ不純異性交友を…」

「長い。要点だけまとめて報告したまえ」

「美人と幼なじみと言うのが羨ましいであります！」

「よろしい！判決！死刑！」

「理不尽な！」

「横暴だ！」

「黙れ異端者！ええい、灯油はまだか！？」

灯油！？燃やす気か！？魔女狩りを現代でやるつもりか！？

「まあまあ、皆の衆。落ち着くのじゃ」

ナイスだ秀吉！

「秀吉は雄二と佳史が憎くないの？」

「冷静になつて考えて見るのじゃ。相手はあの霧島翔子じゃぞ？男である雄二よりも、むしろ興味があるとすれば…」

「…そうだね」

あるえ？秀吉？俺のフォローは？

そして2寮の事情を知っている奴以外の視線が姫路に集中する

「なつ、なんですか？もしかして私、何かしましたか？」

『（君は何もしてないよ。してないけど何かされる可能性が大なんだ）』

『（ごめん姫路。コイツら本当にバカなんだ）』

2寮と1、3寮の温度差がすげえ

…そこから何だかんだで首脳陣全員でAクラスに宣戦布告しに行く事になった

）side 明久）

「一騎打ち？」

「ああ。Fクラスは試召戦争としてAクラス代表に一騎打ちを申し込む」

相手の交渉人は木下優子さん。

ぐっ…秀吉の双子の姉だけあつてすごく可愛い…！でもこの子を認めると秀吉にも気があるという事に…！

騙されるな吉井明久！秀吉は男秀吉は男秀吉は男…よし！

「うーん…何が狙いの？」

「もちろん俺達Fクラスの勝利が狙いだ」

…あれ？佳史が何か苦い顔をしている？

今のところ雄二は何もミスしてないはずだけど…

「だったら嫌だよ。一騎打ちはお断り」

「何！？」

「当たり前でしょ？そっちに佳史や姫路さんがいるのがわかってるのに受けるわけないよ」

「ぐっ…」

あの雄二が完全に言いくるめられてる…

流石『今孔明』の幼なじみ…！

「…でも、条件次第じゃ受けてもいいよ」

「条件？」

「うん。こっちが勝ったら私に佳史に一つお願いを聞いてもらえる権利をくれて、五対五の3勝先取ならいいよ」

「交渉成立だな」

「だね」

「ストップ・ザ・お前ら」

雄二達はかなり勝手な条件で交渉を終えたけど、速攻で佳史が止めにかかる

まあそうだろうね。だって佳史にとってリスクしかないからね

「何勝手に俺の人生賭け金にしてんだよ！」

「…佳史、諦めろ。これも運命だ」

「ちようどいい機会だしね。逃がさないわよ」

「悪魔かお前らは！つーか雄二！何で負ける気満々だ！！」

「佳史、泣きながら言わないで…」

「こっちまで悲しくなってくるのっ…」

…いつもなら異端者は許さないけど、今回はそんな気にならない

だってなんか佳史が哀れすぎるから…

「ただ、勝負の内容はこちらで決めさせてもらつ。そのくらいのハ
ンデはあつてもいいだろう?」

「え? うーん…」

「……受けてもいい」

うわっ!? びつくりした!

ムツツリーニ並みに気配が無かつたぞ!

「……雄二の提案を受けてもいい」

「あれ? 代表いいの?」

「……その代わり、追加条件」

「追加条件?」

「……うん。負けたら優子のは別に何でも一つ言つことを聞く」

こつ、これは姫路さんの貞操と人生観の危機!? どうしよう!? も
しそんな事になったら…

ドキドキして夜も眠れないよ!

「……っ!」 カチャカチャ

「ってムツツリーニ！まだ撮影の準備は早いよ！
というか負ける気満々じゃないか！！」

「……………」ブンブン

くっ、これも計算のうちだったら…霧島翔子、恐るべし…！

「じゃ、こうしよう？勝負内容を3つはFクラスが、2つはAクラスが決める。それでいいでしょ？」

「今度こそ交渉成立だな」

ちなみに佳史はさっきの傷をまだ引きずっている

だから反対意見は…

「雄二！まだ姫路さんが了承してないのにそんな勝手な！」

僕のこれだけだ。

「心配すんな。絶対に姫路に迷惑はかけない」

「雄二…」

なんか心配なんだよなあ…

side out

第十一問（前書き）

「…ねえ、 には将来の夢ってあるの？」

「なんだよ急に…考えた事ねえな」

「そうなんだ。私にはあるよ？」

「へえ」

「ちょっと！なによその興味なさそうな声は！」

「いや、実際に興味ねえし…わかった。わかったから腕を放そう」

「もう…私の夢はね？一人じゃ叶えられないんだ」

「そんなに人手がいるような夢なのか？」

「ううん。一人でいいの。だって…」

「のお嫁さんになることだもん」

『断る』

「無理 もうお義母様に許可は貰ったから」

「あのクソババアアアアっ!!」

第十一問

『中国後漢の時代に、シヨクの劉備に三顧の礼を経て仕えた稀代の名丞相の名前を応えなさい』

姫路瑞希の答え

「諸葛亮孔明」

雑賀佳史の答え

「諸葛孔明」

教師のコメント

「正解です。姫路さんはよく名の亮まで知っていましたね」

坂本雄二の答え

「雑賀佳史」

教師のコメント

「それはあだ名です」

その他Fクラスの答え

「雑賀佳史（今孔明）」

教師のコメント

「だからあだ名ですって」

「では両名共準備は良いですか？」

一騎打ちの立会人は高橋女史。ここ数日の戦争で何回も呼び出した
り呼び出されたりしている。

知的な眼鏡とタイトスカートから伸びる美脚が綺麗な担任になって
欲しい先生ランキング二位の美人さんだ

「ああ」

「……問題ない」

ちなみにここはAクラス。まあ、最終戦が腐った畳とか締まらなさ
すぎるし…

「それでは一人目の方、どうぞ」

「将、お願い。」

一人目は将か…早速キツいな…

「捨てるしかねえな…」

「そついえばお前風祭とルームメイトだったな。何か弱点とかない
のか？」

「ねえな。アイツ全教科三百点代中位で、保体と物理は四百中盤だ」

「…捨てるか」

だからそう言ってんじゃん

「…将？」

あれ？いないのアイツ…ってまさか！

俺はAクラスの方ではなくFクラスの中を探す

「姫路さん、いつも通り可愛いね。ようこそAクラスへ」

「え？あ、あの…」

「ああ、俺は風祭将。気軽に将って呼んでよ。とりあえずメールアドレスを…」

…やっぱり

将は基本的にはいいやつなんだが、寮に入ってから寮長に悪影響受けてるからな…

まあ、それは…

「…将？あなたは何をしていますかね？」

「ん？美穂？まあ、待て。とりあえずそのスレンダーな女性にも声を…痛たたたたた！？」

「さあ、名指しで指名されてるんですから行きますよ」

佐藤が将の耳を引っ張って引きずる

流石2寮のストッパーだ

「明久、逝ってこい」

「今二人して字が違ったよね!？」

「大丈夫だ。俺は明久（の負け）を信じている」

「右に同じだ。気楽に逝ってこい」

「…やれやれ、そこまで言われたら断らないじゃないか」

そう言って明久が前にでる

「それではAクラスは風祭くん、Fクラスは吉井くんによろしいですか？」

「うい」「はい」

「科目は？」

「何でもいいです」

…明久、格好付けてるつもりだろうが、無駄だ

お前がバカなのは皆知ってるから

「じゃ、物理で」

「わかりました」

「ふう…やれやれ、とうとう僕も本気を出す時が来たか…」

はい、三流コント始まりまっす

「ああ、もう隠さなくてもいいだろう」

「見せてやれよ明久。お前の本気を！」

『おい、吉井って実は凄いヤツなのか？』

『いや、いつものジョークだろ？』

『でも雑賀も反応してるし…』

Fクラスからざわめきがあがる

…あれ？君達味方だよね？

「…吉井、だつたか？お前…」

「あれ、気付いた？ご名答。今までの僕は全然本気なんて出しちゃあいない」

…あの自信はどっからきてんだろっ

「くっ…！まさかこんな所に伏兵が…！」

「そうさ、君の予想通り。今まで隠してきたけど、実は僕」

そこで言葉を切り、二人共召喚を始める

明久は余裕そうに、将は苦い顔をしている

「左利きなんだ」

Aクラス	風祭将	VS	Fクラス	吉井明久
物理	438点	VS	62点	

「ひでぶっ!!」

正に瞬殺

「さて、次に行くぞ雄二」

「ああ。勝負はここからだ」

「ちょっと待った!さてはキサマら僕を全然信頼してなかったでしょ!？」

何を今更

「信頼?何ソレ?食えんの?」

「一度も勝つと信じてるとは言っていない!」

「お前らを本気を出した左で殴りたい!!」

「では、二人目の方、どうぞ」

明久を美波が（物理的に）落ち着かせた後、二回戦が始まった

…つーか高橋先生、目の前で起きた暴行ぐらい止めようぜ？

「……………」スクツ

二回戦は康太。ようやく科目選択制が役に立つ

康太は普通科目は明久と同じくらいのバカだが、保険体育は学年トップ。科目を選ぶ今、これ以上頼りになる奴はいない

「じゃ、ボクが行こうかな」

相手は工藤。コイツも確か保体は400オーバーの猛者だったはず

「そろそろ実践派と理論派、どっちが上か決着をつけようよ!」

「……………望むところだ」

なんか二人の間に火花が散ってるような…

「…そうだ!もしムツツリー二くんがボクに勝ったら…」

「……………」?

「スパッツの中身、見せてあげるよ」

「……………っ!？」ブシャアアアア

鮮血が舞う…ってそんな事言ってる場合じゃない!

「ムツツリーニっ!」「康太あっ!！」

「あ、あれ？」

どうやら工藤にも悪気は無かったようだが…

「工藤!お前ムツツリーニを殺す気か!？」

「ち、違うよ!それよりとにかく保健室!」

康太は試合が終わった明久と工藤が連れて行く事になった

「しっかりしろ!ムツツリーニっ!！」

「ムツツリーニくん!傷は浅いよ!？」

「……………6万?相場は6文のはず…」

「ムツツリーニiiiiiii!！」

「死んじゃダメー!ー!！」

…マジで大丈夫かアイツ?

「……代わり、出す？」

「…ウチの負けでいい。工藤も行っちゃったし」

「わかりました。それでは…」

Aクラス 工藤愛子 VS Fクラス 土屋康太
実践派 VS 理論派
WIN VS OVER KILL

いや、確かに出血多量だよ？でもオーバーキルって…

その前にまだ康太は死んでないからな！？

「それでは三人目の方」

「はっ、はい！」

「それなら僕が相手をしよう」

来たか久保利光。

俺と姫路が脱落した事で学年三位になった男

「ここが一番の心配どころだ」

心配どころ？雄二もわかってないな

「雄二、大丈夫だ。何の心配もない」

「?どういう事だ?」

「...さあ?強いて言うなら」

「科目はどうしますか?」

「総合科目でお願いします」

「それでは...」

高橋先生が操作を行い、二人の召喚獣が喚び出される

「姫路は本当にいい奴だってことだ」

Aクラス	久保利光	VS	Fクラス	姫路瑞希
総合科目	3997点	VS	4409点	

決着は、一瞬で着いた

『ま、マジか!?!』

『この点数、霧島翔子まではいらないが木下優子に匹敵するぞ...!』

Aクラスから次々と驚愕の声が上がる

「ぐっ...!姫路さん、どうやってそんなに強くなったんだ...!」

つい最近まで拮抗していたのがつつり差をつけられたんだ。そりや気にもなるわな

「私、このクラスの皆が好きなんです」

「Fクラスが好き？」

「はい だから頑張れるんです」

…嬉しい事言ってくれるな

こんなバカばかりのクラスを好きと言ってくれるとは…

「では、四人目の方、どうぞ」

高橋先生にも少し焦りが見え始める。まあ無理もないが

「アタシが行くよ！」

「俺が行く」

…さて、この妙な因縁と縁にケリを着けようじゃねえか

…なあ？優子

第十二問（前書き）

感想待ってます

第十二問

次の() 内に入る同じ語を答えなさい

『ぢ』() ああ() ぢ() ()

姫路瑞希の答え

「松島」

教師のコメント

「正解です。松尾芭蕉の有名な俳句です」

雑賀佳史の答え

「恨めし」

教師のコメント

「五・七・五の文字数はあっていますが……どこの幽霊ですか」

須川亮の答え

「抹殺」

須川亮のコメント

「異端者には死を!!」

教師のコメント

「だから君はモテないんだと思います」

「佳史、賭けは覚えてるわね？」

「ああ。Fクラスが勝ったら俺の勝ち、Aクラスが勝ったらお前の勝ち。勝った方が負けた方に何でも一つ言うことを聞いて貰える、だったか？」

『何だとっ！？』

何故お前らが反応する？

『木下優子に何でも言うことを聞かせられるだ！？』

『何と羨ま…じゃ無くてけしからん！』

『なら俺は秀吉をもらっ！』

「…Fクラスが負けた時は想定しないんだね…」

「だからワシは男じゃと…」

カオスだな

「…バカばかりね」

「否定は…出来ないな」

「まあ、とにかくアタシが聞きたいのは…佳史が勝ったら何を頼むのかって事」

何を頼むのか…？

「……………」

「…佳史？」

「……………考えてなかった」

『うおいつ！』

Fクラス全員ツツコミ！

ノリのいいこのクラスが俺は大好きです

「優子はどうなんだ？」

「アタシ？アタシはもちろん…」

満面の笑みを浮かべる優子

…なんで俺の冷や汗が止まらないんだろうな

「『許婚の確定化』よ」

『殺せえっ！！』

「え！？何！？」

「あーもう！いちいち突っかかってくんじゃねええっ！！」

俺VSFFF団。ラウンドワン！ファイト！

「ぜえ…ぜえ…」

『……………』

結果は、ラウンド8で全員KO

「佳史がここまで手こずるなんて珍しいわね」

「コイツら嫉妬のボルテージと怨念の高さで戦闘力代わるから…」

「…なるほどね」

「…そろそろ勝負を始めてもらえませんか？」

高橋先生の催促も来たので、勝負を始める

「科目は何にしますか？」

「古典で」「保健体育で」

「…どっちにするんですか」

「お前らもう二回選択権使っただろ！譲れ！」

「それはそれ、これはこれよ！吉井くんの「何でもいいです」って

選択権放棄でしょ!？」

「明久てめえっ!!」

「僕っ!？」

「…佳史、選択権くらい譲ってやれよ。お前なら教科が何でも一緒
だろ？」

「ホラ!坂本くんもそう言ってるじゃない!」

「お前本当になりふり構わねえな!!雄二!俺の保健体育は明久以
下だ!」

「…は?」

「あ、バカ!それ言ったら勝てないじゃない!」

「もともとお前に勝たせる気ねえわ!」

「許婚とか冗談じゃない!」

「…もう、総合科目でいいですね」

「へ?」

「承認します」

「高橋先生!？」「あんなそんなキャラでしたっけ!？」

まさか高橋先生もボケ属性だったとは…！

Aクラス	木下優子	V S	Fクラス	雑賀佳史
総合科目	4486点	V S	4652点	

『何だあの点数！？』

『アイツ本当にFクラスか！？』

「流石佳史ね…」

「まあ、やる気さえ出ればそれなりにはな」

ちなみに保体は一桁だ

決着は、久保と瑞希同様に俺の召喚獣が居合い抜きで即刻着いた

「Fクラスの勝利です」

追い込まれているのに特に騒がないAクラス。それだけ霧島に信頼を置いているんだろう

…さっき優子もあまり落ち込んで無かったしな

勝負は大将戦。雄二に委ねられた

「教科はどうしますか？」

「教科は日本史。内容は小学生レベルで百点満点の上限ありだ！」

ザワッ

『上限ありだつて？』

『しかも小学生レベルつて満点確實じゃないか！』

『注意力と集中力の勝負になるぞ…』

Aクラスもこれは予想していなかったのか、驚きを隠せていない

『秀吉、なんでアタシがCクラスの人達を豚呼ばわりしてる事になつてるのかなあ？』

『はっはっは、それはじゃな、姉上の本性をワシなりに推測してあ、姉上つ違つ…！その関節はそっちには曲がらなつ…！』

ぐああああああつ…！！

ゴキッ、メキッ、バキバキバキ、メリッ…

…秀吉、生きてるかな

「わかりました。それでは問題を用意しなければなりませんね。それでは少し待っていて下さい」

高橋先生が教室を出て行く

真面目そうだし、あらゆる資料持つてんだろうな

「雄二。後は任せたよ」

「ああ、任された」

がっちり握手する明久と雄二

この二人、仲悪いように見えて実は仲良いからな

「……………」ビッ

大丈夫。忘れてないからな康太。

「お前の力には随分助けられた感謝している」

「……………」フッ

「坂本くん、あのことを教えてくれてありがとうございます」

「ああ、明久の事が。気にするな。後は頑張れよ」

「はいっ！」

「ねえ佳史、僕って姫路さんに何か悪い事したかな」ボソッ

「何でだ？」ボソッ

今の会話にそんな下りは…

「だって、姫路さんが僕の事で頑張るって…暗殺しか無いじゃないか…！」ボソッ

…明久の鈍感は一回死ななきゃ治らない気がしてきた

「佳史も。お前には策でも戦争でも世話になった」

「…やる事はわかってるな？」

「勿論だ」

ハイトッチを交わして雄二を送り出す

後は雄二が油断せずに勉強してれば…

『霧島翔子さん、坂本雄二くん、視聴覚室まで来て下さい』

「いよいよですね…」

「そうだな」「いよいよだね」

今はAクラスのモニターで二人の勝負の様子を見ている

「ちなみにそっちの勝算はあるの？」

「雄二が横着せずに勉強していれば勝てる」

「それとあの問題が出ていれば…です」

「うん。もし出ていたら…」

『俺達の…勝ちだ!』

() 年 鎌倉幕府設立
() 年、大化の改新

「…あ！」

「よ、吉井くん！」

「うん！これで僕らの卓袱台が…」

『システムデスクに！』

「……………」

「あれ？佳史？どうしたの？」

「まだだ。まだわからねえ」

「？」

雄二が満点を取らなければこの勝負には勝てない

「考えすぎだったらいいんだがな…」

Aクラス	霧島翔子	VS	Fクラス	坂本雄二
日本史	97点	VS	53点	

Fクラスの卓袱台がみかん箱になった

…同時に、俺と雄二の人生が終わった

第十三問（前書き）

PV10000突破！

ユニーク1500突破！

本当にありがとうございます！

第十三問

『WTOとは何か答えなさい』

姫路瑞希の答え

「世界貿易機関」

教師のコメント

「正解です」

雑賀佳史の答え

「Want To Oleの平穩無事」

雑賀佳史のコメント

「もう二度と戻れないあの日々…」

教師のコメント

「君の身に一体何が起こったんですか!？」

坂本雄二の答え

「雑賀佳史に同じ」

坂本雄二のコメント

「考える事は同じはず…。俺達の、人生は…！」

教師のコメント

「…雑賀くん共々生きる希望を持って頑張ってください。相談ならいつでも聞きます」

木下優子と霧島翔子の答え

「W…私は

T…当然

O…夫のモノ」

二人のコメント

「……浮気は許さない」

「私は佳史のモノで佳史は私のモノです…！」

教師のコメント

「雑賀くんと坂本くんの心労の原因はあなた達でしたか」

木下秀吉の答え

「W…ワシは

T…とにかく

O…男なのじゃ!」

教師のコメント

「…頑張ってください」

「雄二いいいいっ!!」

明久と俺を筆頭として視聴覚室になだれ込む俺達

「三対二でAクラスの勝利です」

わかってんだよ!言われなくてもわかってんだよそんな事は!

「……雄二、私の勝ち」

「……殺せ」

「良い覚悟だ!殺してやる!歯を食いしばれ!」

「今回ばかりは同感だ!死をもって償えこのクソ野郎!」

俺と明久がアホ雄二に制裁を下そうとするが:

「吉井くん、落ち着いて下さい!」

「佳史!こんな所で暴れないで!」

俺は優子に抱きつかれて前に進めなくなる

「だいたい53点ってなんだ!0点なら俺みたいに名前の書き忘れ

とかあるだろうけど…」

「いかにも俺の全力だ」

「「この阿呆があーっ！！」」

「アキ！落ち着きなさい！アンタだったら30点も取れないでしょうが！」

「それについては否定しない！」

「お前も黙ってるドカスが！」

「ぐうっ！？いつもは割と優しい佳史の罵倒はかなりダメージがっ

…！」

明久がさめざめと泣き始め、瑞希と美波が慰めにかかっているが今はそれどころじゃない！

「……でも、危なかった。雄二が所詮小学校の問題だと油断していなければ負けてた」

「言い訳はしねえ」

………ブチッ

「…俺さあ、お前に横着しないでちゃんと勉強しろつつつたよなあ？」

「け、佳史？目が笑ってないぞ！（バシィ）うおっ！？お前木刀な

「んてどこから（ビシィ）ぬおっ!？」

「…質問してんのはこっちだ」

「（…魔王降臨、ね）」

「（……優子、どういう事?）」

「（佳史はキレるとヤクザがビビるくらい威圧感を出すの。普段はかなり気が長いからか、一度キレたら手がつけられないのよ）」

「（普段怒らない人が怒ると恐いの典型的な例なのね…）」

「（確かに佳史くんは怒りませんし…）」

「さア…どうして勉強しなかったのかなア…?」

「す、すみませんでしたっ！自分チョーシ乗ってましたっ！」

土下座で俺に謝る雄二

「…そーかそーか。雄二の中では人の人生く面倒臭いのを回避か…」

「須川。FFF団を使って雄二を逆さ吊りにしろ。康太、今すぐ五寸釘と金鎚、ロウソク持って来い。今から朝まで『新撰組・榎屋喜右衛門コース』今夜は朝まで（痛みで）寝かせないゾッ」
「だ」

「それ拷問だよな!？」

拷問？人聞きの悪い

「何言つてんだ雄二？俺がそんな事するわけねえだろ？」

「だよな…佳史が友達にそんな事を…」

「最高に惨たらしく殺してやる…明日の朝日を拝めると思っちなよ？」

「状況悪化したあつ！？」

俺がそんな生温い処刑で甘んずるとでも？

「……雑賀、雄二を殺しちゃダメ」

「……………チッ」

嫁（霧島）に感謝しろよ

「……ところで、約束」

「……………！」カチャカチャカチャ！

「ムッツリーニ、僕も手伝うよ！」

バカがなんかやってるが無視するでしょう

「わかっている。何でも言え」

そして霧島は姫路に一瞬視線を向けた後

「……雄二、私と付き合って」

と、言い放った

むづ…『結婚して』くらいは言つと期待してたんだが…まあ、いいか
そうして俺はいつも通り教室を立ち去ろうと

ガシッ

「あら、佳史。どこに行くのかしら？」

できませんでした

「いや、トイレに…」

「その前に私のお願い事“2つ”聞いて貰えないかな？」

…拒否権あんの？

あ、無い？そうですか

「…って2つ！？約束は一つだろ！？」

「何言つてんのよ。アタシとアンタの約束で一つ、FクラスとAクラス
の契約で一つよ？」

…あ

「雄二いいいいっ！てめっ…雄二いいいいっ！」

絶対いつか柵屋喜右衛門コース実行してやる！

「まずは一つ…戦争前に言った通り、『許婚の確定（親承認済み）』
よ」

…しつこいようだけど拒否権は？

…やっぱり無い？ですよ〜

「……………」

「返事は？」

「…わーっ たよ」

「……………」やっぱりここは荒療治でアタシの気持ちを伝えるしか…」ボ
ソッ

ん？何か言ったか？

まあもうどうでもいいか〜

…全世界の普通の付き合いが出来るカップルなんて滅んでしまえ

「…うん、二つ目は…ちょっと来て」

そう言って手を引かれる

向かう先は…さっき秀吉が消えていったあの扉

… っ て待て待て待て！

「優子！何かしたなら謝る！謝るからサブミッションだけはあつ！」

「ちよつと！アンタの中でアタシはどうなつてんのよ！」

（明久side）

霧島さんが雄二の事を好きだったなんて…

世界はなんて残酷なんだ！僕達の希望がまた一つ消えたじゃないか！

「……世界は、いつもこんなはずじゃなかったで満ちている…！」

「ムツツリーニ…」

今ならそのセリフを使っても許される気がするよ…

「嫌だ！まだ死にたくないっ！」

「ちよつと！だから何にもしないってば！」

ふと佳史の声が聞こえたと思ったら、Aクラス専用の資料室の前で必死に抵抗する佳史とどうにかして引きずり込もうとしている木下さんがいた

… あ。 ついに佳史が引きずり込まれた

(ここからは諸事情により音声のみお楽しみ下さい)

「はぁ…はぁ…何で抵抗するのよ…」

「俺はここで死ぬわけにはいかない…!」

「もう…仕方ないわね。秀吉!」

「うおっ!何すんだ秀吉!?離せ!」

「ふっふっふ…ワシだけ逝くのは納得いかん…せめて佳史、お主だ
けでも…!」

「くっ…っ…秀吉、お前力そんな強くなかっただろ!」

「死への恐怖が…限界を乗り越えたのじゃ…」

「脅迫か!?脅迫されてんのか!」

「さあ姉上!やるのじゃ!」

「待て!字を訂正しろ!この小説はR15だ!」

「さて、佳史。目を閉じなさい」

「や、やめ…むぐう!」

ピチュ…チュ…「ん」…チュバ…

「…ん、はア…」

「……………」

「どう？佳史？これで私の気持ちが…って佳史！？」

「……………」クテッ

「佳史ー！！！」

その後僕達は、しばらくフリーズしたまんまだった

PS、鉄人が担任になって、美波と姫路さんに僕の食費を潰される事が決定しました

…もう、寮に入ろうかな

…いや、でも、ゲームが…

練習問題『僕と食費とスタンガン』佳史の場合』

くAクラス戦から二時間後く

「映画館に行くわよ！」

「……………は？」

なんともいきなり過ぎてついて行けない

「それよりこっちはお前のせいで酸欠からの貧血だぞ？どうしてくれんだコレ。体だるすぎんだけど」

しかも優子が俺にキスなんざしやがったせいでFFF団に追われる事が決定したし…何？厄年？

「ホラ、コレ！『恋海』！前から見たかったのよね…」

「オイ、聞ってる？メツチャしんどいんだって」

「さあ、行くわよ」

「聞けエエエエー！！」

そんな事で俺の話を聞く優子じゃなくて…（泣）

「僕の食費がああっ!!」

…あの声は明久か？

多分原因は瑞希か美波…いや、両方が

「って佳史？何でここに……ああ」

俺の隣の優子を見て羨ましそうに俺を見る明久

「木下さんみたいな美人と付き合つどころか許婚なんて…憎しみで人が殺せたら…!」

「じゃあ代われ」

「喜んで!!…って痛たたたた!!」

「アゝキゝ?」

「吉井くん?」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい…」

バカめ。後先考えないからそんな目に…

「佳史？代わるってどういう事かな？かな？」

「待て優子。世界が違う。そして俺の関節はそっちにはまがらなくあああああっ!!」

「佳史はやっぱり木下さんに？」

「ああ、貧血で弱ってんのを無理やりな」

「諦める…お前らはまだいい方だ」

「ん？雄…二…？」

「ちょうどいい所に…？」

振り返ると、霧島と大昔の手錠をかけられた雄二がいた

「「雄二いいいつ！？おまつ…何やってんのおおおお！？」」

「男とは…無力だ」

雄二は虚ろな目で宙を見ながら悟りきった表情でそう言った

「ちょ、雄二？何で霧島さんに繋がれてるのさ！？」

「まだ諦めんなー！俺達にはまだ希望が残ってる（はず）だー！」

「いや、お前はもう許婚の時点で詰んでると思う」

「……………男とは…無力だ…」

「佳史までダークサイドに！？二人共カムバックー！」

男連中がてんやわんやしてる間…

「あら？代表も結局映画にしたの？」

「……うん。ここなら雄二と長く一緒にいれるから」

「一途ですね…」

「ウチも素直になれたら…」

ガールズトークが盛り上がっていたそうな…

「……佳史（雄二）、何が見たい？」

「早く自由になりたい」

「……じゃあ、コレ。『地獄の黙示録・完全版』」

「オイ待て。それ三時間三十二分もあるぞ」

「……二回見る」

「一日の授業より長いじゃねえか！」

「……授業中、雄二に会えない分のう・め・あ・わ・せ」

「冗談じゃねえ、俺は帰るぞ」

「……………今日は、帰さない」

バリバリバリバリ

気絶させられた雄二が連行された

…うん。いつも通りだ。

「仲の良いカップルですね…」

「ホントね…」

「羨ましいわね…」

三人とも、何かが間違ってる。

…優子、頼むから見習わないでくれ

その後、普通に『恋海』を見たのだが…

「……………」

「佳史…何で私を…遠ざけるのかしら…？」ボソリ

「遠ざけてんじゃねえ。むしろ何で俺の肩に頭を乗せようとするっ。」
ボソリ

「……………!!」

優子との静かな攻防に氣を取られて内容が頭に入らなかった…

第十四問

『あなたが今一番欲しい物を教えて下さい』

姫路瑞希の答え

「クラスメートとの思い出」

教師のコメント

「なるほど。お客さんの思い出になるような、そういった出し物もいいかもしれませんね」

土屋康太の答え

「Hな本（ ）成人向けの写真集」

教師のコメント

「取り消し線の意味があるのでしょうか」

坂本雄二の答え

「俺の平穩無事」

教師のコメント

「何があったのですか？筆圧が物凄いのですが」

雑賀佳史の答え

「自由 日 ） （ 許婚と暮らす家」

教師のコメント

「何故始めの答えに血痕がついているのでしょうか？」

木下秀吉のコメント

「もう…諦めるのじゃ…」

「佳史」

「ん？」

「如月ハイランドって知ってるわよね？」

「今建設中の無駄にデカイ遊園地なんかだったか？確かもうすぐプレオープンだったな」

「そう、それよ。だからオープンしたら一緒に……」

「霧島と工藤とでも行ってこいよ」

……待て。無言の笑顔で関節を取ろうとするな」

「だ！か！ら！一緒に行こうって言ってるのよ！……」

「やだ。だるい。面倒臭い……ってぎゃああああ……」

「なんでなのよ！理由を説明しなさい理由を！」

「人いっぱいの中にわざわざ疲れに行きたくない」

「……ふーん。なら、人がいっぱいじゃなかったら行ってくれる？」

「んな事無いと思うが…それなら別に」

「（ニヤリ）約束よ？もし破ったら…」

「破ったら？」

「…………（ニコッ）」

「え？何その笑顔？すっげえ恐いんだけど」

新学期が始まり、徐々に試召戦争の騒ぎも収まってきた

今は文月学園の学園祭、『清涼祭』の準備に学年を問わず全生徒が追われている

……はずなのだが

「勝負だ！須川くん」

「お前の球なんか場外まで飛ばしてやる」

準備をサボって野球をしていた

…俺？屋上で昼寝してる

オイ、誰だ今お前もサボってんじゃねえかとかほざいた奴は

「貴様ら、学園祭の準備をサボって何をしているか！」

「ヤバい！鉄人だ！」

あ、見つかった

まあ俺には全く関係ないけど

「吉井！貴様がサボりの主犯か！」

「ち、違います！どうしていつも僕を目の仇にするんですか！？…
そ、そうだ！佳史！佳史がどこかでサボってます！」

明久の奴…俺を売りやがったな

…後でクロス

「ああ、奴か。問題ない。既に手は打っている…それよりまずは貴

様だ吉井！」

「くっそおおお！！！」

バカめ。人を売ろうとした報いだ

…ん？『手は打っている』…ってヤベ！

俺は急いで屋上の扉に手をかけて思いっきり開く！

「こんにちは。雑賀くん」

「アアハイ、コンニチハ」

そこには、凄い笑顔で威圧感を放っている高橋女史がいらっしやった

「準備をサボってお昼寝とは、いい度胸ですね…さあ行きますよ」

「ち、ちくしょおおお！！！」

そのまま俺は高橋女史の召喚獣によって教室に連行された…

「さて、そろそろ春の学園祭、『清涼祭』出し物を決めなくちゃいけない時期が来たんだが…とりあえず、実行委員として誰かを任命する。そいつに全権を委ねるので、後は任せた」

雄二の野郎心の底からやる気ねえな

…まあ、俺も似たようなもんだけど

さて、ラノベでも読んどくか

「じゃあ実行委員は島田でいいか？」

俺がだらけている間に島田が推薦されたらしい

「うーん…補佐次第で受けてもいいけど…」

『吉井でいいんじゃないか？』

『雑賀でも上手いことできそうだな』

…寝とけばいいかな？

キンコンカーンコン

「あゝ、やっと終わった〜！」

ゆっくりと伸びをして鞆を持って立ち上がる

さて、将と雄二にでも声かけてどっか遊びに行くかな

「オイ雄……雄二。一緒に帰る」「なっ！？まだチャイム鳴って一分も経ってねえぞ！？」「二……」

は無理だな。しゃあないから将とゲーセンでも「秀吉」、佳史どこ？」

……

「戦略的撤退！！」

「絶対逃がさない！！」

俺と優子の逃走中（賞品は放課後の自由）…スタート

「よお、佳史。奇遇だな」

「やっぱりお前も普通的手段じゃ逃げられねえか」

俺と雄二が潜んでいるのは女子更衣室

下手に女子禁制の場所に隠れても優子なら躊躇なく踏み込んできそうだな

P P P P

「ん？明久か？」

俺も雄二の携帯に耳を近づけて話を聞く

「もしもし」

『……雄二、今どこ』

「人違いです」

霧島の声が聞こえた瞬間通話を切る

「お前そろそろ反応が反射レベルになってきてるよな」

「ほっとけ」

P P P P

つと俺にもか

秀吉なら心配ないな

「どうした？何かあったか？」

『佳史。大人しくFクラスに戻って来なさい』

「I'm American」

プツッ

ふう…危ない危ない

「…流石に俺も国籍をごまかすのは思いつかなかったぞ」

「うるさい」

…なんか無性に虚しくなった

「「……………」」

良かった。雄二も虚しさを感じたようだ

…言い合いしなけりゃよかった

ガチャリ

「やあ、雄二に佳史。奇遇だね」

「「どういう理由があれば女子更衣室で居合わせるのか教えるバカ」

」

理由も無く女子更衣室に入ってきたとか変態じゃねえか

ガチャ

「あら？雑賀くんは坂本くんは吉井くん？」

「よお佐藤」

「将のストッパーか」

「奇遇だね」

入って来たのは佐藤

つまりは女子

んでここは女子更衣室

「せ、先生！覗きです！変態です！」

「逃げるぞ二人共！」

「了解！！」

「何！？また吉井と坂本と雑賀か！？」

俺まで問題児のカテゴリーに入れんな鉄人！

結局その後鉄人からは逃げ切ったが、明久の策略で清涼祭に強制参加することになった

不幸だ…

アホパラジオ！第一回（前書き）

なんか急にやってみたくなった

アホパラジオ！第一回

「文月学園第二寮！」

『アホパラジオ〜！！』

『待てと言われて待つバカはいない！』

佳「ども〜、二 F 所属の雑賀佳史です」

『ようこそ A クラスへ』

将「ハロー！二 A 所属の風祭将でっす！」

佳「アホパラジオ第一回目の放送が始まりました〜」

ワアアアア

将「イエーイ！」

将「…ってどうしたよ佳史！もっとテンション上げていっつぜ！」

佳「…いや、な？さっきある情報が入ってきてよ…」

将「情報？」

佳「このラジオにゲストが来た場合、秀吉と優子以外は声優さんテ
イストでいくらしい」

将「いい事じゃないか！むしろ女性陣 Welcome！」

佳「バカ野郎！お前：声優さんテイストってことはアレだぞ？下手しなくてもダチャーンVer.の瑞希が来るって事だぞ！？」

将「（。。。）」

佳「そんなもんが来てみる！どうあがいても…」

『俺らでさばききれんわけがねえだろうが！』『ドドン

将「…お母さんVer.の吉井を呼ぶしかないな」

佳「美波でも大丈夫だぞ？白瑞希になるから」

将「まあ、それはそれとしてさ…このラジオさ？第一回目なんだよね」

佳「そうだ。何か不具合でもあったか？」

将「いやさ…つまりはさ…お便りも質問も全く無いんだよね」

佳「マジでか」

将「マジだ。…という訳で、作者が今の内に質問貯めておこうとしているわけよ。…受験中なのに」

佳「勉強しろ作者。…という訳で、疑問質問ふつおた何でも構いません。何かあれば感想に書き込んでください」

将「作者受験のため、しばらくは更新がめちゃくちゃ不定期になりますが、応援していただければ幸いです！」

佳「それではまた次回！」

「またね」

将「お前本当に終始ローテンションだな」

佳「うるせ。性分だから仕方ないだろうが」

第十五問

『「パンがないなら、お菓子を食えばいいじゃない」と言う言葉で有名な人物を答えなさい』

姫路瑞希の答え

『マリー・アントワネット』

教師のコメント

『正解です。傲慢な人物としても有名ですが、悪女としても有名ですね』

坂本雄二の答え

『手作りじゃ無ければそれでいい』

教師のコメント

『人物を答えて下さい』

雑賀佳史の答え

『食った後に何もないならそれでいいや』

教師のコメント

「本当に君と坂本君は何があつたのですか？」

2 寮寮監（鉄人）のコメント

「諦めずに自由を信じて頑張れ」

風祭将の答え

『じゃあ俺は君を食
教師のコメント

『書かせねーよ?』

「で？俺に何を協力してほしいって？」

「僕は風祭くんが出るから、雄二と一緒に召喚大会に出てほしい」

「ヤダ、ダルイ、メンドイ」

「何故にカタコト!？」

何で俺がそんな面倒な事を理由もなしにやらなきゃいけないんだ

「そもそもお前と雄二で出ればいいだろ？」

「いや…それがね…」

「理由説明中」

「…って訳なんだ」

「噛み砕くと、優勝と準優勝の賞品に人用の腕輪を作ったはいいけど、両方不良品だったと？」

「うん」

「…ペアの理由はわかった。でもそれだけか？」

「そ、そそそれだけって!？」

わかりやすっ!なんか隠してんのまるわかりだな

「…姫路関連か？」

「!？」

「嘘つけねえなお前」

まあそれが明久^{バカ}が明久^{バカ}たる所以の一つでもあるからな

「仕方ない。協力してやるよ」

「本当に!？」

「嘘ついてどうするよ。…まあ、その前に」

明久が唾を飲む

何警戒してんだ？

「Fクラスの出し物って結局何になったんだ？」

「やっぱり寝てたんだ…」

「普段はただのバカだけど、坂本の統率力は凄いわね」

「そうだね。普段はただのバカなのにね」

「…言うておくがそう大差ねえからな。お前ら」

「何…だと…!」

あれだけまとまりが無かったFクラスが雄二のおかげで一致団結
元々体力だけはアホみたいにある連中ばかりなので、作業はあつ

という間に進んでいく

「それにしても、よくあのオンボロ教室を此処まで綺麗にできたね」

「あ、それはですね、木下さんと佳史くんがどこからかテーブルクロスとかカーテンとかを持って来て、こう手際よくテキパキと」

そう言っただけ俺と秀吉を尊敬の目で見る瑞希

なんか照れくさいな、こういうの

「まあ、見かけだけはそれなりになったんだがな」

「クロスを捲るとこの通りじゃ」

クロスの下からは、少し痛んだ机と、普通の机が出て来る

「EクラスとDクラスの人達には感謝しなくちゃね」

「若干苦勞はしたがな」

Dクラスは清水を交渉のテーブルに出して美波をダシにしたらすぐカタがついたんだが…Eクラスには少し条件付けられた

「ここまで装飾が完璧なら後は出し物ね…「……飲茶も完璧」きやつ！？」

「常日頃から気配消して行動すんなよ康太……」

「……つい、癖で」

どんな癖だよ

「ムッツリーニ、厨房の方もオーケー？」

「……味見用」

俺達の前に胡麻団子とお茶を差し出す康太

自分で食って確かめろってことだろう

「わぁ……美味しそう……」

「土屋、これウチらが食べちゃっていいの？」

「……（コクリ）」

「では、遠慮なく頂こうかの」

女子＋秀吉が胡麻団子を勢いよく頬張る

「お、美味しいです！」

「本当！表面はカリカリで中はモチモチで食感もいいし！」

「甘すぎないところも良いのう」

どうやら胡麻団子は女子がトリップするほどの大成功らしい

…にしてもこうして見ると本当に女にしか見えねーな、秀吉。

「じゃ、俺らも貰うか」

「そうだね。ムツツリーニ、いただきます」

「……（コクコク）」

皿に乗った胡麻団子を一つ掴み、女子達と同じように勢いよく頬張る

……ふむ

「表面はゴリゴリ、中はネバネバ。甘すぎず、辛すぎる味わいと妙な刺激が何とも　グゲパッ」

「表面はゴリゴリでありながら中はネバネバ。甘すぎず、辛すぎる味わいがとっても　ンゴパッ」

同じような感想を言っ て俺と明久がぶっ倒れる

ああ、意識が…

＼side 明久＼

常日頃から命の危険を体験してるせいか、僕は軽く走馬灯を見ただけで済んだんだけど…

「ムツツリーニ！佳史の容態は！？」

「……脈拍低下、瞳孔拡大を確認。かなり危険な状態」

「くそっ！念のためムツツリーニはAEDを準備して！」

「……了解!!」

耐性が低い佳史じゃ耐えられなかったらしい。この前のお弁当騒ぎの時も僕達の中で一人だけ気絶してたし

「…なっ!？何でアンタがこんな所に!？…何？六千万？んなもん持つてる訳ねえだろ。…は？だったらチューでいい？ふざけんな。アンタは懲りずに弟襲つてろ」

…何だろう。凄いい僕にとって不穏なやり取りがされてたような…

とりあえず今は人命救助が優先だ！

〈side out〉

「…ふっ、地獄を見たぜ…」

何の比喻でもなく、リアルに。

「佳史…生きてて良かった…!」

「……心配させるな」

「ありがとっ。本当にありがとっ…!」

三人で生きる喜びを噛みしめる

ちなみに女子達はまだトリップしてる

「うーっす。戻ってきたぞー…ん？なんだ、美味そうじゃないか。どれどれ？」

「……あ……」

雄二が突然戻って来て止める間もなく、皿の上の対人決戦用宝具を口にする

「…たいした男じゃ」

「雄二。キミは今最高に輝いてるよ」

「A級戦犯の汚名返上だな」

「？お前らが何を言っているのかわからんが…ふむふむ、外はゴリゴリでありながら中はネバネバ。甘すぎず、辛すぎる味わいがとても　んゴパツ」

アーメン（-o-;）

「あー、雄二。とっても美味しかったよね？」

この状態でその質問をするお前は筋金入りの鬼畜だと思う

「……雄二？」

「あれ？雄二？ゆーっーじー」

返事が無いのを怪しんで、雄二に近寄り顔に手をかざす

「……………」

「佳史？雄二は「息、してない」救急車あ——！！！！！」

その後、偶々近くに置いていたAEDで雄二は一命を取り留めた

…何でAEDがFクラスにあっただんだろうな？

第十六問

「物を押したりした時に働く、押した力に対して対象に働く力は何か、例を交えて答えなさい」

姫路瑞希の答え

「反作用…台車に乗りながら壁を押すと、自分が壁と垂直に逆に動いた」

教師のコメント

「正解です。例もわかりやすいですね」

木下優子の答え

「反作用…押しても彼氏がなびかないので引いてみる」

木下優子のコメント

「結局効果はありませんでした…」

高橋洋子のコメント

「例が『押して駄目なら引いてみる』になっているので間違いですが、個人的には応援しています。頑張ってください」

霧島翔子の答え

「押してダメならスタンガン」

霧島翔子のコメント

「……いっつあふりーだむ」

高橋洋子のコメント

「坂本君の御冥福をお祈りします。

…いや、ホントにすみませんでした。」

「えー、それでは試験召喚大会一回戦を始めます」

あの後教室で雄二がどこに行っていたやら、明久の同性愛者疑惑とかがあったがまあ、それはどうでもいいや

とにかく召喚大会一回戦が始まった

「三回戦までは一般公開もありませんので、リラックスして全力を出して下さい」

「へーい」「わかってますよ」

むしろこんな所でアガってどうするよ

「頑張ろうね、律子」「うん」

…にしても相手は女子か…というかどこかで見たような…

「では召喚してください」

「試験召喚!!!」

Bクラス 岩下律子&菊入真由美

数学 179点 & 163点

「Bクラスにしてはなかなかかって所か」

「そんなもんだな」

「「む！」」

如何にもFクラスのクセに！みたいな目線で睨みつけてくるが…今回は相手が悪かったな

「「試験召喚！」」

Fクラス 坂本雄二 & Fクラス 雑賀佳史

数学 179点 & 347点

「何あの点数！？」

「Fクラスなのに！？」

俺は振り分け試験は点数“だけ”はAクラスだったんだよ！！

…言うだけ悲しいから言わないが

「あれ？雄二お前『勉強が全てじゃないって事を証明したい』って言うってなかったか？なんで勉強を？」

「前に、翔子に聞かれたんだ」

「何て？」

「……………式はどこで挙げたいか、と」

ああ…色々すっ飛ばしたなあ…

「俺はもう負けられない！次で勝たないと、俺の人生は…！」

「…ドンマイ」

掛ける言葉もないわ

「そろそろ開始して貰えますか？」

「血も涙もねえなオイ」

そう言うだけ言っただけで木内先生は開始の合図を出す

「オイ雄二、来るぞ」

「婿入りはいやだ…霧島雄二なんて御免だ…！」

駄目だコイツ、早くなんとか（物理的に）しないと

「はあ…一人でやるしかないな…」

俺の召喚獣が装備の日本刀を構える

「律子！」「真由美！」

「行くわよ！」

「そうか、逝ってこい」

「「……………え？」」

Fクラス 雑賀佳史 VS Bクラス 岩下律子

数学 347点 VS 0点

一瞬で間合いを詰め、抜刀術で岩下の召喚獣の首をはねる

…………グロい

そしてそれで啞然としている隙に菊入の召喚獣も倒して、試合は終わった

「婿入りは嫌だ婿入りは嫌だ婿入りは嫌だ」（ブツブツ…）

「悪いが俺はコレをシバいて戻して地獄を見せなきゃいけないから帰らせて貰うぞ？」

そのまま啞然としている二人を放っておいて、さっさと会場を後にした

さて、Aクラスに行くか…優子に見つからないように

「お帰りなさいませ、お嬢様」

『キヤー——!!』

「お席に案内致します。こちらへどうぞ」

「あの！雑賀先輩ですよね！？良かったらアドレス教えてもらえませんか！？」

「申し訳ございません、携帯はロッカーに置いておくよう指示されておりますので、今手元に無いのです」

…とりあえず、どうしてこうなった…？

第十七問

『バルト三国と呼ばれる国名を全て挙げなさい』

雑賀佳史の答え

「リトアニア、エストニア、ラトビア」

教師のコメント

「その通りです」

木下優子の答え

「吉井明久×坂本雄二×木下秀吉」

教師のコメント

「気を確かに持って下さい」

霧島翔子の答え

「しょうゆ、こしょう、ゆづしゅつ」

霧島翔子のコメント

「……私と雄二の子供の名前候補」

教師のコメント

「もう問題関係無いじゃないですか…」

吉井明久の答え

「香川、徳島、愛媛、高知」

教師のコメント

「どう見ても間違いなのに何故か丸を付けたりしました」

「ありがとうございました」（棒読み）

清涼祭もかなり長い間開放されるので、当然何度か休みが入る

今の客でようやく一度目の休み時間を迎えた

「お疲れさん、佳史。お前も大変だな…」

手に飲み物を持って将がこっちに寄って来る。当然将も執事服だ

「そう思うならさっさと帰らせろ」

「俺には無理だ!」

「即答かい」

「いや、だって…」

将が俺の後ろを指差すので、そっちを向くと…

「離して!! アタシには佳史(執事ver.)をお持ち帰りするっていう最優先任務があるのよ!」

「それもただの願望です! 落ち着いて下さい!」

「願望じゃないわ! 自然の摂理よ!」

「もはや規模が尋常じゃ無くなってる!?!」

「旦那の成長は妻が確認する義務があるのよ! それについてはアタシがルールよ!?!」

「展開早っ！？どうやってそんな考えにたどり着いたんです！？ソレ以前にまず貴女と雑賀君はまだ夫婦じゃありません！」

まだは余計だバカ

「大丈夫！二年後には雑賀優子が木下佳史になってるから！」

「御免被る」

「ちょ、誰か助けてえ〜！！」

どうやら俺の一言が余計だったらしく、優子の力がさらに強くなったようだ

「おい将、いいのか？相方がピンチだぞ？」

「済まん美穂：俺は：無力だ：！」

それでいいのか幼なじみ

「まあいいじゃねえか。お前嫌がってた割にはきっちり仕事こなしてたし」

「……………」

否定できねえ…

「仕方ねえだろ。気持ちとは裏腹に体が勝手に動くんだから」

「もはや接客のプロだな」

昔ホストのバイト（年齢詐称して）やって稼いだからなあ…作り笑いが自然とできる

「それを言うなら将だってノリノリだっただろ？」

「俺の場合クラスの仕事だしなあ」

「そうか、じゃあ俺はそろそろ着替えて帰…『それはダメ』」

帰る、と言おうとすると、優子を筆頭にAクラスの女子（霧島、愛子、佐藤を除く）がドアの前に立ちはだかる

「…なんでさ」

「……雑賀、もう少しいてあげて」

「とは言っても俺達の場合、クラスの設備がかかってるからな…」

どうやら俺が寝てた間に稼いだ金で設備を交換すると言っ話が出てたらしく、先日雄二がババア（学園長）にそれを認めさせたらしい

傷んだごさは流石に寝づらいので、案外やる気だったりする

「……今の優子達のテンションだと、雑賀が帰ったら多分仕事にならない」

「佳史くん、私から見てもカッコイイし執事服似合ってるしね。またファンが増えるんじゃない？」

「止めてくれ」

これ以上兄とか呼ばれたくない…妹なんか一人で十分だ

「兎に角、仕事云々の前にそろそろ三回戦なんだよ」

「……なら、仕方ない。優子、どいてあげて」

「仕方ないわね…」

その後雄二と合流し、難なく三回戦を突破した

「…………ヤベエな」

「ああ、本当にまずいな。どれくらいヤバいかっていうとマジヤバ
い」

「落ち着け」

「落ち着いてられるか！これに負けたら、俺は…俺はアアア…！」

準々決勝

坂本雄二&雑賀佳史

VS

霧島翔子&木下優子

第十八問（前書き）

キャラ設定改新します

読み直したら訳わかんなかったんで…

第十八問

昔、母さんが言っていた

『佳史、良いことでも悪いことでもいい。自分のしたい事で一番になりなさい』

……正直、これは絶対に必要ないと思うが…これでいいのか？

…もう、勘弁してくれ

以上、『モテる男校内第一位』（78％）、『兄にしたい男子第一位』（98％）、『罵りたい男子第一位』（68％）、『料理上手（和食部門）第一位』（100％）の四冠を達成した2 F、雑誌賀佳史くんのコメントでした

「…なんでこんなに客がないんだ？」

召喚大会の帰りに雄二と次をどうするのか話し合っていたが、教室に着くと、予想外の光景に絶句した

「すっからかんだな」

「お、戻ってきたようじゃの」

「ああ、それより秀吉、これはどういう事だ？また常夏コンビの作業か？」

「常夏コンビ？」

「ああ、佳史は知らなかったな、あのな…」

（雄二説明中）

「…なるほど」

次来たらシメる

「しかしのう、アレ以来妙な客は来ておらんぞ」

「だとすると…」

雄二がこっちを見る

「考えられるのは二つ。その常夏コンビが悪評を流しているか…噂自体が独り歩きしているかだ」

「噂が独り歩きじゃと!？」

「落ち着け秀吉。確かにそれなら取り返しはつかない…しかしそれなら間違いなく鉄人なり高橋女史なりが確認しに来る。しかし今までそれがない。つまりは常夏コンビの逆恨みだ」

そんな考えをしていた時…

「ただいま」

「邪魔するぜ」

「明久か」

明久とついでに将が帰って来た

「将もついてきたのか？」

「ああ。姫路さんと島田さんと木下弟のウエイトレス姿…見ないわけにはいかないだろ!!」

将はどこまで行っても変態だった

「…ムツツリー二とは真逆だね」

「…ある意味男らしいな」

「……そんな事実はない」

今更だな康太

「それより佳史、お客さんだよ」

「あ?………唯?」

「…お兄ちゃん」

「葉月もいるですっ」

「なんだ、チビもいたのか」

「チビじゃないです!葉月ですっ!」

「悪い悪い、よく来たな葉月」

「はいですっ!赤いお兄ちゃん!」

目か？目のことかコルア

無意識に人の急所（complex）を抉る葉月はある意味最強だ
と思います

「で、唯。お前優香さんは？まさか一人で来たとかはないな？」

清涼祭は原作と違って金土日の3日間で、大会は金日（日は決勝
のみ）の2日間で行われる…事にしといて下さい

「…優ねえの所」

「…ああ…」

頑張れ優子

「た、助かったのじゃ…」

『あれ？雑賀、妹か？』

『可愛いなあ。後10年くらいしたらお兄さんと付き合わないか？』

『むしろ俺は今だからこそ付き合いたいがなあ』

「お前らそこに直れ。この世の地獄をみせてやる」

『『すいませんしたっ！自分ふざけてました！』』

次はねえぞ

「「ただいま」」

「あ、おかえり姫路さんにみなm「瑞希！」「美波ちゃん！」

「「殺るわよ！」」

「「ぶあつ!？」」

…美波と瑞希が帰って来た瞬間に偶々葉月が明久に抱きついていていたため、明久がお星様となった

「姫路に島田か。どうやら勝ったようだな」

この状況で落ち着いてるお前は大概大物だと俺は思う

「瑞希、そのまま首を後ろに捻って。ウチは膝を逆方向に曲げるから」

「こ、こうですか？」

「…秀吉」

「うむ。明久の命は後5センチじゃ」

秀吉と二人で明久に合掌しながら、そんな会話をしていた

「それで、この客の少なさはどういう事なの？」

教室を見回して言う美波

「そう言えば葉月、ここに来る途中で色々な話を聞いたよ？」

「葉月、教えてくれないか？」

葉月と屈んで視線を合わせる

…雄二が目を細めていたが子供好き（良い意味で）なのか？

「えつとね…中華喫茶は汚いから行かない方がいいって」

噂は消しきれなかったのか…？

「ふむ…例の連中の妨害が続いているんだろうな。探し出してシバき倒すか」

「例の連中って常夏コンビ？まさかそこまで暇じゃないでしょ？」

「いや明久、むしろそいつ等以外にそんな暇な事するバカはいないだろ？」

「あ、それもそうだね」

「兎に角、噂の広がり具合は確かめないと…葉月、それはどこで聞いたんだ？」

「秀吉、すまないが昼休憩に入っていていいか？明久と佳史も」

「構わぬ。ならば姫路と島田と島田妹も一緒に行くといいじゃろ」

「いいの木下？じゃあ葉月、お姉ちゃんと一緒にいこう？」

「はいですっ！」

「いいんですか？ありがとうございます。木下君」

「で？どこだ葉月」

「えつとですね…短いスカートを穿いた綺麗なお姉さんが一杯いる
お店」

「何だつて！？佳史、雄二、それはすぐに向かわないと！」

「そうだな明久！我がFクラスの成功のために（低いアングルから）
綿密に調査しないとない！」

バカのテンションが遂に振り切った

「落ち着けバカ共。多分それ口くなことさあ！行くぞ！」「O
K雄二！！」あゝ……………」

もう一回捕まっちゃえお前ら

第十九問

雑賀夫妻のマル秘！恋愛テクニック講座！

「……………おい優子。これは何だ。十文字以内で説明しろ」

「題名の通りよ」

「おいおい、このタイトルでうち上げもいいところじゃねえか」

「ここは、私優子と夫佳史で、私達の恋愛の秘訣を教えたり、相談に乗ったりするコーナーです」

「誰が夫だ」

「さて、早速ハガキの紹介です」

「聞けエエエ！！」

「『突然ですが、仲良し夫妻の二人に質問です』」

「オイ差出人。俺はいま寝てる所を拉致られて、手足の関節を外されてベッドに寝かされて、このアホに馬乗りにされている。コイツを真似して犯罪にはしる前にもう一度考え直せ」

「『私には夫がいるのですが、すぐに他の女性と会話をしたりして、浮気をします。どうしたらいいでしょうか』」

「会話位許してやれ。むしろそれだけで浮気とは言わん」

「そうよね。浮気は許せるものじゃないわ。だから浮気出来ない状況を作ってあげないと」

「浮気も何もまず付き合つてすらないし許婚とか口約束だから無効だしそもそも俺とお前はまずただの幼なじみだと言う事を自覚しろ。そしてそれは彼氏が出来てから実行しろ」

「まずは夫に浮気のリスクを教えてあげることね」

「…優子？さつきから俺の直感が逃げると叫んでるんだが、気のせいだと思っていいんだよね？」

「…………用意する物は三つよ」

「待て。今の間の真意を教えろ」

「まずは…『石畳』」

「ダウトだ優子。それ拷問用具だから。浮気云々の前に処刑だから」

「二つ目は…『ひたすら自分（嫁）が愛を囁き続けるCD』」

「洗脳か！？洗脳する気か！？止めるその手に持っているCDプレイヤーを捨てろ！！」

「三つ目は…」

「この状況でよく冷静に事を進められるな！？」

「…『姫路さんの料理』」

「無理！文月学園の生徒かつ瑞希と親しい奴以外にその方法は無理だ！そして手に入れた所で男の方が処刑される絵しか見えねえ！」

「この三つで夫に浮気の恐ろしさを教えてあげなさい」

「俺は今、その三つを持ってるお前が何より恐い」

「以上、『もうすぐ坂本（17）』からのお便りでした」

「明らか知ってる奴じゃねえか！？雄二、今すぐ海外逃亡しろ！でないと死ぬぞ！！」

「…優子、いい加減に手に持っている物を捨てろ」

「…何で島田さんと姫路さんを名前で呼んでるのか説明してもらいましょうか？」

「まあ待て話せばわかる。だから関節をあらぬ方向に曲げるのはやめっ…！！」

「よし、戻ろう」

「そうだな。明久。Aクラスだけは止めよう」

「ここまで来て何を言っているのさ！早く中に入るよ！」

「この人でなし！！」

葉月の案内でたどり着いたのはAクラスのメイド喫茶・ご主人様とお呼び！ と言う名の魔窟だった

「そっか、こっつて坂本と佳史の大好きな霧島さんと木下さんのいるクラスだもんね」

「…お兄ちゃん。優ねえから逃げちゃダメ」

「二人共、女の子から逃げ回るなんてダメですよ？」

くっ！抵抗しているうちに女子組が追いついたようだ。余計逃げにくくなっただじゃねえか！！

「雄二、佳史。これは敵情視察なんだ。決して趣味じゃないんだから……」

「あそこに趣味で来てるバカがいるんだが？」

「……………！！」パシャパシャパシャパシャ

唯の目を抑えながら明久に言い放つ。

…唯にこんな汚れきったバカを見せる訳にはいかない

「……………ムツツリーニ？」

「……………人違い」

無理があるだろ

「どこからどう見ても土屋でしょうが。アンタ何してるの？」

「……………敵情視察」

「へえ…その割には目線が低いかな」

「……………！！」ブンブンブン

「ムツツリーニ、ダメじゃないか。盗撮とか、撮られている女の子が可哀想だと　「一枚百円」ニダース貰おう　可哀想だと思わないのかい？」

「アキ、普通に注文してるわよ」

「千円札を取り出しながら言うセリフじゃないな」

まあ、バカはほつといて…

「佳史、今更逃げるなんて言わないわよね？」

「……………モチロन्दス」

ぐう…！今は美波の勘の良さが憎い…！

「それじゃ入るわよ。お邪魔しまーす」

「……………おかえりなさいませ。お嬢様」

今回の出迎えは霧島だった（以前の強制連行の際は愛子）

「それじゃ僕らも」

「はい。失礼します」

「お姉さん、きれー！」

なんかどんだん中に入っていく…俺は絶対に入ら…「…お兄ちゃん、行こ？」

……………入ってしまった

「おかえりなさいませ、ご主人様、お嬢様…いらっしやい唯ちゃん」

「……………」コクリ

どうやら唯はさっきまでここにいたようだ

「…チツ」

「……おかえりなさいませ。今夜は帰らせません、ダーリン」

アレンジ半端ねえ

「…お兄ちゃん、翔子お姉さん、寝ないで遊ぶの？」

「気にしないでいい」

唯にまだ大人の世界は早い

「…お席にご案内します」

そして席に行く途中…

「それで優子？佳史くんとはどうなの？」

「どどどどどっつて…」

「A？B？C？まさか（オメガ）までやっちゃった？」

「隠語が古いし！しかも　ってどんなコトまでやってんのよ！？」

「どんなって…この上。詳しく言つとナニで」ストップお母さん！

「ここ飲食店!」 あら……」

「…お兄ちゃん」

「知らん。秀吉そつくりの女子とその母親なんて俺は知らん」

『……………』

止めろ! 哀れみの目で俺を見るな!

「…………ご注文をどうぞ」

「ウチはこの“ふわふわシフォンケーキ”で」

「あ、私もそれを」

「葉月もー!!」

「僕は水で。付け合わせに塩があれば嬉しい」

明久はスルーで

「俺は“苺のミルフィーユ”」

「…唯も」

「じゃあ俺は「……ご注文を繰り返します」…？」

何をしでかす気だ…？

「“ふわふわシフォンケーキ”が三つ、“苺のミルフィーユ”が二つ、水と塩がお一つ、“メイドとの婚姻届”が二つでよろしかったでしょうか？」

「全然よろしくねえぞ…！」

「つーか何故に二つ！？雄二だけなら一つで十分だろう…！」

「佳史テメエ！裏切るのか…！」

「裏切るも何も俺はもう詰まれかけてんだよ！」

こんな所でゲームオーバーはごめんだ！

「……………」

「し、翔子！？これ本物のウチの実印だぞ！？どうやって手に入れた！？」

「何で俺の実印まで！？これわざわざ寮の俺の部屋に耐火金庫の中の防水金庫の中の耐衝撃金庫の中の暗証番号15桁の金庫に入れたハズだぞ…！」

『“ただ木下さんを警戒してるのさ（のよ／んですか／んだ）！

？」

お前らはアイツの恐ろしさを知らないんだ！！

「…では、メイドとの新婚生活を想像しながらお待ち下さい」

「…佳史、俺はどうしても優勝しないといけないんだ…！」

「俺もだ…！」

そんな感じで決意を新たにしていると…

「あ、あの人達だよ。さっき大きな声で『中華喫茶は汚い』って言うてたの」

葉月が指差す方を見ると、ハゲとキューピーがFクラスの悪口を大声で叫んでいた

…さて

「落ち着け明久」

「ぐえっ！？」

先走りそうだった明久を強制的に止める

「あたた…佳史！どうして止めるのさ！」

「バカ、こんな所で殴り合いなんざやってみろ。悪評はさらに広まるぞ」

「けどだからって『Fクラスをバカにしないで!』」

「…優子?」

何故か優子が常夏コンビ（命名雄二）にタン力をきっていた

）side雄二

『Fクラスをバカにしないで!』

その言葉に少し耳を疑った

自分でもバカで多少なりクズだと言う自覚があったから

『あ?何でだ?成績は悪いし問題ばかり起こす。しかも学校初の観察処分者までいる。これをクズと言わずに何て言うんだ?』

『そんなのその人の性格には関係ない!成績だけで判断出来ないコトだってたくさんあるわよ!』

『うるせーな。お前だってAクラスだろ?良い格好しようとするんだよ。お前だって内心Fクラスはクズだって思ってたんだろ?』

『アンタ達と一緒にしないで!さっきから何回も来て同じ事ばかり言ってる!はつきり言って迷惑なのよ!』

『んだと?女子だと思って優しくしてりゃつけあがりやがって…店員が客に逆らっていいと思ってるのか!』

『……………！』

そう喚いてハゲが木下姉に殴りかかる

…くっ！止めるにも距離がありすぎて間に合わ…

パシッ

「…そりゃこっちのセリフだ、ハゲ」

『なっ！？』

その拳を抑えたのは、佳史だった

「先輩だと思って下手にでてりゃ…随分調子に乗ってくれたもんだな」

『んだテメエ！部外者は引っ込んでろ！』

「ほお…ならアンタらは二対一で女子と力づくでやらなきゃ勝てないカス野郎なんだな」

『…言葉遣いに気を付けろよ』

「お前らが尊敬に値するならな」

『あゝあゝ！？おい常村！』

『おう！やっちまうぞ！』

… あゝあ、常夏も可哀想にな

ありゃ完璧にキレたよ

俺や明久でさえ、本気でキレた佳史を見たことねえのに

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9700u/>

バカばっかの君たちへ～アホメンパラダイス～

2011年11月27日21時50分発行